

その外の人々はどんな人でも、煩惱や、その習氣がぬけてをらぬから模範にはならぬのである。これでもつてこれ等の戒が如何に緊張した心から、嚴密に意を用ひて些かの誤りもないやうにつこめねばならぬか、知られるであらう。そしてこれ等の戒をたもつ人々には、八つの勝れた功德がある。佛も説かせられて、もし人々が一日一夜この戒を守つて犯さないならば、人、天、聲聞、緣覺の世界にも見られぬほどの勝れた利益を受けるこゝが出来るのである。この事は、經の中に廣く説かせられてある。かういふ利益があるから、父の王は日々に、この戒を受けられたのである。

『時に目犍連は、鷹隼のやうに、空中を飛んで、一王のために法を説かせなされた』

こゝは父の王の請ひに因りて、聖きみ法が説かれたこゝを述べたものである。すなはち目連は自由を得た智慧で、父の王の請ひの意味を知り、不思議な力を發して、瞬く間に、王のこゝに至つたのである。そして、目連のこの不思議な力は一念ひの間に四天下を百千邊もまはり得る程であるから、鷹隼などは、兎ても比べやうもないのであるが、今は人々に通力の一端を示すために、快鷹を以て喩せられたのである。『毎日かやうにして王に八戒を授けた』といふのは、王がまだ無事であつたので、毎日

八戒を授けられたものである。所で若しも八戒が勝れた利益があるといふのならば、一度受けられたらよかりさうなものであるのに、何故毎日受けられたかといふに、山はそれだけ高うても、海はそれだけ深うても、刀はそれだけ利うても、日はそれだけ明かでも、人はそれだけ善うても、賢者はそれだけ徳があつても、佛はそれだけ聖くまし／＼でも、飽き足るこゝがないやうに、王は囚はれの身となり、進退の自由を失ひ、絶えず誰か喚び出されて殺されはしまいかこの不安に襲はれて居られたものだから、夜も晝も八戒をたよりにし、益高く善を積み上げて、末の世に受く可き福の資にしやうといふ望みから、毎日、八戒を受けられたのである。そして、世尊はその重い慈悲から、王の身を慰み案じたまふて、若しや囚れの勞から、憂惑にしづみ、憔悴こけるやうなこゝもあらうかとおほしめし、弟子の中で最もよく説法し、善い方便をもちりて人の心を開くこゝに妙を得て居る富樓那を使はして、王のために説法せしめ、王の憂ひ悩みを除かしめたまふたのである。

『かくて二十一日を經過したが、一いかに悦ばしさうに見えた』

王は王妃から奉る食物で、飢渴きをまぬがれ、二人の聖者から受ける戒法で、意が善く開

けたので身の苦みも去り、心の憂も亡くなり、顔容も自然に和ぎ、悦びの色も現れてきたのである。

三 母後の幽閉

「そこで阿闍世王が門番に對うて問ふには、父の王はまだ生きておいで、あるか」

こゝは阿闍世が父の王の容子をたづねたところである。闍王は父王を幽閉してから、づいぶんの日數も過ぎ、且つ人の交通もすつかり絶つて、水も食物も通はぬやうにしてから二十一日にもなるので、もう父の王も命切れてをられるだらうと思つたものだから、宮の門のまゝへ出掛けて行つて、門番に「父の王はまだ生きておいで、あるか」をたづねたものである。全體人は一度しか飯を食はぬといふ三七日たてば死ぬるといふこゝがある。然るにいま父の王は何も食はずに居られて、二十一日たつたのであるから、死なれるこゝは問はずともわかりきつたこゝであるに、いま闍王は門番に「父の王は死んでしまはれたか」を問はないで、「生きておいで、あるか」を問ふたのはさうしたわけであるか。思ふにこれは闍王は萬機をすべる王者の地位にあつて、氣儘な行ひをしてはならぬものだから、もし生みの親たる父の王を指して、「死なれたか」を問ふたならば世間からどんな譏過を受けぬとも限らな

い。そこで内心には「死なれた」を思つてはゐるが、口では「生きておいで、あるか」をたづねたのであつて、かうして惡逆だといふ惡評を長く免れやうとしたものである。

「大王よ、王さまはまだ御無事でゐられます。——到底遮り止めるこゝが出来ないのであります」
こゝは王の問に對する門番の答である。王妃がこつそりこ王に食をすゝめられるので、王の命が延び、幾日たつても生きて居られるのであつて、これは門番の過ではなく、王妃のわざであるといふこゝを申し立てたのである。こゝで王妃は王に食をすゝめるまじきには、身の上に變を塗つて、衣の下に覆ひかくし、往還出入にも、だれ一人これを見るものがない筈であつた。それが今さうして門番によつてこの事を知られてゐたかといふに、すべて秘密といふものは、永くたもてるものではなく、たごひ、巧みに、牢く藏したごしても、かへつてあらはれ易いものである。即ち今もそれで囚はれの身である父の王が顔色もかはらず、無事で過されるといふのは、そこへ毎日、ゆきゝされる王妃が秘密に食をすゝめられるからにちがひないといふこゝを門番は疾くに見抜いてゐたのであつた。それで王妃みづからは誰も知つて居るものはないと思ふて居られたのではあつたが、門番はこの場合、かくす

にかくされずして、具さに、その事のよしを王に申し上げたのである。そして門番は、王妃の食をすゝめられることについては、何等阿闍世王の命を承はつてゐなかつたので、これを御遮めしなかつたことや、目連、富樓那の二聖者の空中から飛んで來られるのは、これも門番の力ではさうしてもくひごめることのできなかつたことを申し上げて、自分に過ちのないことを明かにしたのである。

『阿闍世王はこの答を聞いて、—その母を殺さうとした』

こゝは闍王の嗔怒を説いたところである。闍王は門番の分疏を聞き、その母に對して、惡みと怒りをもち、罵りの聲をなつたのであつた。彼はかうして身三口意で逆罪を犯し、惡業をいひなんだすなはち父母を罵つて賊といつたのは、口で逆罪を犯したものの、佛弟子を罵つて惡人といつたのは、口で惡業をなしたものの、劍を執つて母を殺さうとしたのは逆罪を身で犯したものである。然も身三口の所爲は心が主であるから、また意で逆罪を犯したものは逆罪を身で犯したものである。序にいつておろが、逆罪を行ふまでの方便を、惡いひ、行ひ遂げたことを逆いひ場合もあるのである。さて闍王はもご父に怨みをいだいてゐたので、一日も早く死なれることを待つてゐたのであつたが、その母がひ

そかに糧を進められるために、幾日たつても死なれぬものだから、こんごは母を罵りて、賊の味方だこいひ。また、佛弟子が父の王のもごへ來去するまきいて、かれ等はどんな魔術をおこなつて、惡王をいつまでも生かしておくのかと、嗔り狂ふたのであつた。『即座に利劍を執つてその母を殺さうとした』こゝは、闍王の嗔りが極度に高まつて、母を逆殺に及ぶころを書いたもので、闍王が母後の頭を驚つかみにし、氷の劍を振がつた、めに、母後の命は最早一瞬にせまつたのである。その際母後は一生懸命に、掌を合はせ、身を曲げ、頭をうなだれ、吾が兒の手にすがりつき、からだぢうから熱汗を流し、心悶えに悶えて、息もたえなくになつて居る。その光景を想へば實に哀れに痛ましい限りこいはなければならぬ。怛忽の間にかういふ苦難にあはうこは、誰が豫期してゐたことであらうか。

『これを目撃た聰明で智慮の深い月光は、—後すざりをした』

これは月光と耆婆との二人の臣が、闍王を切に諫めて、母後に害を加へさせなかつたことを記したところである。この二人はこの國の輔弼の大臣であるから、つねに政事の綱紀となり、國威を萬國に揚げ、八方の國々をして、見習はしめるやうな美風をたもちたいと心掛けて居るころへ、俄に闍王が

逆害を起し、劍をこりて、母后に對つたので、これを見るに忍びず、遂に兩人、あひはかつて、きびしく閻王を諫めたのである。この耆婆といふのは頻婆沙羅王と奈女との間にできた子であつて、閻王は兄弟の間柄の人である。それが今兄の母后を殺さうとするのを見て、月光にもこれを諫めたのである。さて諫めるにあたつて、二人が王を禮拜したのは、すべて目上の人を諫める時の法式である。それでいま二人もまづ禮拜して、王の心を目ざまし、手をつかね、身をかゝめて、自分達の本意を申し上げ、心を開いて聽き入れられるやうに王にねがつたのである。「毘陀論」を引いて諫めたのは古の人もいつたやうに、舊例のないことをいふのは、君子の慚ぢする所であるから、それで古からの歴史、文書を引いて、自分等のいふことの虚言でもなければ、また妄説でもなく、明かに舊例のあることであるといふことを立證せむがためである。即ち昔から禮にそむいて暴逆な君主が、國を欲しさに、父王を殺したことは一萬八千もあるが、國を欲しさに母后を殺したといふことは、一つ歴史にのこつてゐない。いま大王が父王を殺して王位を奪ふといふのは、暴逆ながらも、まだ古からの例がある。しかし奪ふ可きなものも持つて居ない母后を害しやうといふのは、實に古から今に至るまで一つも例のないことである。もしさういふことをあへてするならば、それは王族の家柄を

つけるものであると、事を分けて二人の臣が閻王を諫めたものである。「臣等」はこもに黙視してゐるに忍びぬ』といふのは、いま閻王が逆害をおこし、王族の祖先でも辱かしめるのを見るに、吾等王族のものは耻かしくて、居るどころがないといふことである。「非人』といふのは、最も下等な人達で、生れつき兇暴で、仁義といふことをわきまへず、人間の皮は着てゐるが、行は禽獸にも同じものを指していふのである。しかし王は最も上流の家柄に生れて、萬機をつかさどる地位にあるものであるのに、もし、逆害をおこし、恩を怨に酬いるやうなことがあつたならば、非人さかばかりがないといふことをいひたてたものである。「この城におこし、め申すことができません』といふのには二様の意味がある。即ちその一は王がいま惡を造つて、風教をみだし、禮儀を破るならば、それはこりもなほさす非人であるから、さういふ人を摩訶陀國の君主とし、王舎城の大主とすることはできぬから、この城を出て下さいと、宮城から擯出す意味をあらはしたものであり。その二は、わが王族をけがすやうなのは、遠く音信もできないやうな他國へ追ひやるほかはないと、國を放逐する意味をあらはしたものである。「劍の束に手をかけながら、後すさりをした』といふのには一の疑問がある。即ち既に辭を盡け、色をなして諫めた程ならば、直ぐふりかへつて出て行きさへすればよかりさうなものであ

る。それが後ずさりをしたさいふのはごういふわけかさいふのである。思ふに言をあら、けて王に逆らつたのも、もご母后を殺害する心を思ひこまらしめやうご望んでのことである。だからいまも劍の束に手をかけ、決意をしめして、王の殺意をこめやうごしたものである。また閻王が嗔りの餘り、佩ぶる劍で、二人に危害を加へるかもしれないから、劍に手をかけ、防禦しつゝ後ずさりしたものと見るこごができるのである。

「そこで阿闍世王は、驚き惶れて、—なぜわしのために計つてくれないのか」

閻王は二臣の轟々しい諫めを聞き、身構へつゝ後退るのを見て、もしや父の王の味方をするのではなからうかこ、大いに不安になつてきたので、驚きこ惶れをを生じたのである。そして彼等は自分を捨て、果して誰れを助けやうごするのであらうかこ思ふこ、心が落ちつかぬので、耆婆にむかつて、「古の人も家の禍は親族でなければ救はぬこいつて居るが、おん身は自分の弟ではないか。それに、月光ご一つになつて、自分のために計つてはくれないのか」こたづねたのである。

「大王よ、ではごうご、お憤みなされて、御母君に危害をお加へになるこごだけはおこままり下さいませ」

こ、で二人が心の底をうち明けて、閻王を諫め、若し自分達を味方にしやうご思ふならば、母后を害しないで下さいと申し上げたのである。

「阿闍世王は耆婆の言葉をきいて、—一步も外に出るこごができぬやうにした」

閻王は耆婆の諫めに會つて、心に悔いを生じ、前の所爲を愧ぢて、一人の臣に、哀みを求め、命乞ひをなし、その母を離して、弑するこごを思ひこままり、手の中の劍をもこの匣におさめたのである。しかし、閻王の嗔りはなかくさめず、終に内事のものにいひつけて、母后を王宮の奥深い室に閉ぢこめ、みんなこごがあつても、父の王に遭へないやうにしたのである。

四 母后の厭世

「幽閉せられた韋提希夫人は、悲しみと憂ひに身も心もやつれはて、」

こゝに夫人は死の難をまぬがれたけれども、更に王宮の奥深い室に閉ぢこめられ、水も洩らさぬ守り方に兎てものがれ出づる途もないので、明け暮れ、たゞ憂ひに沈むばかりであつたから、自然にやせおそろへたこゝを明したものである。實にその禍の大なるこゝを思へば傷ましくも、また歎かばしい限りである。今日の苦しい出来事はさうであつたか。わが兒である、阿闍世の喚き叫びに、あつさ思ふ間もなく利きい刃をあてがはれた。そこへ着婆等がかけて来て止めてくれたので、漸く助かつたミ、胸撫でおろしたのも束の間、直ぐにまた慙んなに宮深く閉ざ、れてしまつたのである。何ぞいふ不幸つゞきであらうか。それにしても父の王の御身の上はさうなつたこゝであらうか。食を進らす人もない上に、妾がこんな姿になつたさういふこゝを聞かれては、さぞく憂ひ惱みのまさせられるこゝであらう。さうなつては父の王の御命も最早長くはあるまい。思へば御はしい極みである。あゝ妾も亦さうだこんな有様では佛の御顔もいつになつたらば拜まるこゝであらう。御弟子達にもいつになつたらば逢はれるこゝであらう。闍王のいひつけが嚴しいので、役人達は水も洩らさぬやうに堅く守つてゐるから、自分の命も、もう間もなく盡きるこゝであらう。それにしては死んで行く先きの冥路が案ぜられる。夫人はかういふ具合に父の王のこゝを思ひ、自分の身の上を案じ、ために身も

心も憂ひミ惱みに逼められて、やせこけるばかりであつた。

『遙かに耆闍崛山に向うて―未だその頭をあけきらぬうち』

夫人は既に囚はれの身になつたので、佛のお側へ参るこゝができぬものだから、耆闍崛山の方を向いて、遙かに世尊を敬禮したてまつり、「み佛よ、慈悲の光よ、何卒弟子の愁憂に悩むこの意を知ろしめし下さいませ」こゝまごころめて、お願い申したのである。けに父の王がまだ世に榮へて居られた時は、父の王も夫人も、ミもミに世尊の御弟子のみもミへ参つて教を受けたり、或は世尊や御弟子を我が家へ御迎へして、御教化に預かつたこゝであるが、父の王が幽閉の身になられてからも、慈しみに満ちたまふ世尊は、しばく阿難尊者を遣はして、夫人の憂ひも慰められたのであつた。ミこころが今はこれもこれも涙の種ミなるばかりで、全くみ教を受くべき因縁は断たれてしまつたのである。『しかし御威徳の高い世尊をこゝにお迎へ申すこゝはあまりに恐れ多ふ御座います』さういふのは、夫人が身を低うして佛弟子を御請待申し上げたこゝを述べたものである。全體女の身は福徳を受ける因が尠薄いから、威徳の高い世尊にお逢ひ申すこゝは、甚だ恐れ多いこゝであるので、夫人は目連をお遣はし

下さいませご願ひ申したのである。しかし如来は教化の主でましく、時宜を失はずに、み教を施されるのであるから、夫人も再三言葉をつくして、直接世尊のみ教にあづかるやうにお請ひ申せばよさそうなものである。それなのに目連尊者が阿難尊者をお遣はし下さいと請ふたのはごういふわけであるか。思ふにこれは前にもいつたごほり、佛のお徳は厳かに尊くましますから、軽々しく、微やかな縁で、直接のみ教をお受け申すごは出来ないものである。そこで先づ阿難尊者に會うて、夫人自らの意を述べ、それを世尊に取次いで貰つたならば、世尊も夫人の意をしろし召されて、阿難をして御自身のお話を夫人にお傳へになり、厚い御教化に及ばれるごであらう。かういふ夫人の欲みから阿難に御見ひ申したいごねがうたわけである。次に「悲しみに流れる涙は雨のやうに」「ごいふのは、夫人がみづから省みるご犯した罪が恐ろしく重いので、さういふ汚れた身で、世尊の御哀れみを蒙らうごお請ひ申すごの餘りに勿體なく、胸がせまつて悲しみの涙が目にあふれたごを説いたものである。かうして夫人は渴いたものが水に向ふやうに、遙かに世尊を仰ぎたてまつり、頭を地につけてしばらくは擧げえなかつたのである。

「耆闍崛山にましく、世尊は、一天華を雨らして世尊を供養しまつてゐる」

ごは世尊が耆提の請ひによつて自ら王宮に赴かれたごを述べたものである。その時世尊は耆闍崛山にお座しましたけれども、疾く夫人の心の中をしろしめされて、大目連にいひつけ、空中から王宮さしてゆかしめられたのであつた。これは正しく夫人の請ひに應ぜられたものである。また、佛が耆闍崛山から姿を消されたのは、夫人の囚はれて居る室は禁約がきはめて堅いので、若し世尊が相を現して夫人のそこへお出でになつたならば、閻王が聞き知つて、ごんな難儀を引きおこすかも知れないから、わざと山上から姿を消して、夫人の室へ現はれたまふたのである。「帝釋天や大梵天等の神々」ごは、これ等の神々が、世尊の姿を消しつゝ、王宮に現はれ出でたまふを拜み奉つて、これは必ず希奇な法がごかれるに相違ない。自分等神々も耆提が請つてくれたおかけで、嘗て聞いたごのない勝れたみ教を蒙るごができるご皆希望に充ちて、虚空一つばいに集まり、華をふらして供養しまつり耳傾けて聽聞したごを説いたものである。

「耆提希夫人は思ひがけない世尊を見たてまつて、一眷屬におなりなされたのでありませうか」

こゝは夫人が頭をあけて、世尊をおがみたまつり、怨みに結ばれた情のうちにかきくさいたところである。さて幽閉の韋提希にもなほ身を莊る心は失せなかつたが、いまのあたり、世尊をおがみ奉つては、羞かしさに堪へかね、自ら瓔珞の装ひをかきむしりて懺悔したのである。夫人はもこより王妃といふ貴い中にも貴い位にある人だから、行住座臥つねに多くの人が侍づいて用を便じ、衣服なきみな傍人が着けたことであるが、いま佛をおがみたまつりては、餘りの愧づかしさに、人手をかる隙もなく、自ら瓔珞の莊りをばかきむしつたのである。次に『五體を地に投げ伏せて』とは、内に深く結ばれた怨みと苦惱の感情は、こゝに一時に燃え上つて堪へきれなかつたものだから、思はず立ちあがり、身を踊らして大地に投げ伏したことをいつたものである。こゝには恨と歎きの極、禮儀も作法も打ち忘れた相があらはされて居る。『泣きながら世尊に對うて』とは、夫人が佛の御前も忘れただかのやうに、婉轉まはつて泣きさげび、悶えくるしんで息も絶えらばかりになつたことをのべたものである。さて、かうした韋提希も漸くにして心を沈め、始めて身の威儀をこゝのへ、堂を合せて佛に白すやうに「世尊よ、私は生れてから、今まで嘗て大きな罪を犯したおほえがありません。それにもかゝはらず、かういふ兒と母子になるこゝの世にさきの世にさのやうな罪業があり、さのやうな殃

咎があつたからのこゝでありませうか。それも私だけならば、凡夫の事で、罪が盡きぬから、かういふ悪い報いがあるのだと承知もできませんが、世尊よ、世尊は、てしなき昔から正しき道を行ませられ、あらゆる罪咎を消しほろほし、智慧明かに、誇り圓かな佛でおはしますのに、さうした因縁で、提婆の様なものを眷屬にもつてをられるのでありませうか。あゝあの憎い提婆がなかつたならば、我兒もあのやうな意は起しますまいに。提婆が悪い計みを教へたものだから、阿闍世の心が狂ふて兩親にかういふこゝをするやうになつたのであります。夫人にこつては、所以のないのにふりかゝつたこゝか思はれない。この災難の徑路を教へ給はれ、世尊に請ふたのである。

因に世尊に提婆が眷屬であるといふのは、世尊に白飯王、斛飯王、甘露飯王といふ三人の伯叔が居られたが、提婆はその斛飯王の子であつたので、世尊は正しく從弟の間柄であつたのである。そして後に提婆は世尊の御弟子になつたから、また師弟の關係もあつたので、韋提希はこのこゝを問うて、『世尊は何故にかくも憎い提婆を眷屬におなりなされたのでありませうか』といつたのである。

五 淨土を欣ひ求めて

『世尊よ、さうぞ私に憂ひもなければ、この世がいやになつたのであります』
 これは夫人がみづから苦しみに遇うて、この世のたのみにならぬことをつくづくさみづみて見るこゝ、この世ばかりでなく、至るところみなこの通りで、心を安めるところにてはすこしもない。そこで世尊にお願ひ申して、淨土の無生を説いて頂き、穢れたこの身をすて、淨土に生れ、常住の樂を享けやうと求めたことを述べたものである。

『この世ながらの地獄、餓鬼、畜生が盈ち満ちて一惡人を見たくないであります』
 まゝここにこの世界は、ものみなが悪であるから、一處にして、執着すべきではないが、たゞ愚かなものだけは、煩惱に惑ひ幻されて、いつ／＼までも、こゝに命を貪り、はてしなき苦を嘗めるのである。だからこの世は苦界で、まよへるものに報いられた世界であり、また迷へる彼等がたのみにして居るところである。地獄等の三つは、悪い果報の中でも最も悪いところで、この世ばかりでなく、全

宇宙に漲つてあるのである。このやうに迷界には數知れぬ差別があるが、それはみな、人おの／＼の心に隨うて出来たものである。だから經に「人の業はおのれの識をみちびいて、おの／＼生るべきところへ生れしめ、受くべき果報を受けしめるから、互に見知つて居るものも、次の世では逢ふても知らずに過すことである』と説かせられてある。『私は來世に二度この厭なことをきゝたくありませんね』
 これは韋提希の心に今や眞の信心が惠まれたので、いま、で造りなした自分の罪惡が、骨髓に徹到つてうち知られ、永く愛着して居たこの世がかへつて厭はしくなり、ひこへに淨土の無爲を欣ひ、常住の樂を喜ぶやうになつたことを述べたのである。まゝここに無爲の世界へは輕々しくは階られず、苦惱にみちたこの世は容易に離れがたい。だから若しもこの金剛の信心が發らなかつたならば、ながく生死の元を絶ちきるこゝがでなかつたであらうのに、今親しく慈深い世尊のみ教を受けたてまつりて、まゝこの信心を惠まれたために長き歎きからまぬがれるこゝができたのである。かくて夫人は『二度このいやなことをきゝたくありませんね。またあの無道の惡人を見たくないであります』といつたのである。自ら胎をいためた子ですらも、生みの親に又向ふこの世には、何ひもつゝしてたのみにするものはない。再びかういふ提婆や、閻王のやうに父殺をしたり、僧團を壊したりして、惡

評を立てるのをきゝたくも、見たくもない。韋提希はこのことを痛感して申し上げたのである。

「それゆゑ、私は今、世尊に對うて、一罪を悔いる次第であります」

これは夫人が淨土のやうな妙な處へは善行がなうては生れることができないと思ひ、罪愆があつては、それが障りになつて生れることができないと思ひ、恐れから、哀れみを求め、罪を悔いたのである。

「世尊よ、世の光よ、一佛の國を拜まして下さいませ」

夫人はさきに、自分の生れ場所を教へたまへ願つたことであるが、いまこゝは、そこへ生るべき行を教へたまはれと請うたのである。「世の光」は日がよく闇を除くやうに、佛の智慧のみ光は、無明の夜を輝かしたまふから世の光といふのである。かくて夫人は「さう心をおちつけ、さう想ひをこらしたならば、清淨な國へ生れることができませんか」と世尊に御尋ね申したのである。

「世尊は韋提希夫人のこの切なる請ひを聞きしめされて一韋提希に拜ましめられたのである」

こゝは世尊が前の韋提希の請ひに應じさせられ、廣く淨土を現して拜ましめられたところである。すなはち世尊は韋提希が廣く淨土を求めるのをみそなはせられて、眉間から光を放たせられ、十方の國々をてらし、それ等の國々を光の中へ攝めて、頂上にかへし、更に金色の臺に變じたまふたのである。そしてその臺の形は須彌山に似てゐた。この須彌山といふ山は、腰が細くて、上ほさ闊うなつてゐる山である。さてあらゆる佛の國々が、その金色の臺の中に並び現はれ、種々さまざまに莊嚴られたことであるが、これはみな、世尊の自在みな神力から現はし出されたものであつて、韋提希夫人は世尊のお慈悲で、これ等の國々をば、いさも明かに拜みたてまつることができたのである。

しかし、こゝに一つ氣を付けねばならぬことがある。これは、さきに韋提希夫人は「廣く憂ひのない世界を説いて下さいませ」と、世尊へお請ひしたのに、なにゆゑ今、世尊はその請ひに對して、一言も説かせられずに、それ等の世界を金の臺の中へ現はし出されて、韋提希夫人に拜ましめられたのであるかといふことである。思ふにこれは世尊に深い思召しのあることであつて、韋提希のこの請は廣く淨土の門を開くもので、極めて大事なことであるから、口で説いて聞かせるよりは、目で拜ませる方が惑はないでよからうと思召して、一つく佛達の淨土を夫人の眼の前に現はし出し、彼の所須む

處を心のまゝに選ばしめ給ふたのである。

「ごきに韋提希夫人は世尊に申し上げるには、一光明輝いてをります」

こゝは夫人が佛達の國々を拜んだので、世尊に對し奉りて、その恩徳を感謝することを述べたものである。夫人は世尊がお示しになつた佛達の國々を残らず拜むに、いづれもみな、精妙で華麗ではあるが、極樂の莊嚴には兎ても及ばぬので、「世尊よ、私はいまかのみ國へ生れたいとおもふのであります」ご申し上げたのである。

全體あらゆる佛達はみな一樣に感ひを斷つて、同じ道を行まれたのであるから、開かれた誇りもみな一つであつて、差別のあらう筈はない。それだのにさうして佛達の國にかういふ優れたのや、劣つたのやこいふ區別であるのであるか。思ふに、世尊は法王でまじく、自由自在で神通をそなへて居られるので、或は優れてゐるやうに、或は劣つてゐるやうに、いろ／＼にして示させられるから、ごともまよひの凡夫では、そのごごをはかり知るごごは出来ないのである。世尊はいつも相手のごご、ろに隨つて、時には直接に、時には間接に教化をし、利益を施されるから、恐らくは今もわざご諸佛

の國の優れたごごを隠して、ひごへに極樂の勝れたごごを顯はさせられたのであらう。

「けれども、私は今、極樂世界の阿彌陀佛のみもごへ参りたいごごおもふのであります」

こゝは韋提希夫人が正しく數多き佛の國々から特別に阿彌陀佛のみ國を選んで、そこへ参りたいご望んだごごを説かせられたごごである。まごごに極樂は阿彌陀佛の四十八願の誓願から出來あがつたごごで、この一つ／＼の願が皆力強い勝因ごごなつて、そこから勝れた行がなされ、その行に依りて勝れた果を感じ、その果が勝れたごごりごごなり、そのごごりごごから極樂が感じられ、そこに悲心に満ちた教化が顯はれ、智慧の門が開かれたのである。かうしてお慈悲の油のつきるごごがないから隨つて智慧のみ光の消えるごごもなく、いつも慈悲ご智慧ごをならべ行ふて甘露の雨をふらし、生きごし生けるものを潤して、普く救はせらるゝのである。それであるから、この經ばかりではなく、この外のもろ／＼の經典にも極樂へ生れよご勤めてあるごごが非常に多く、もろ／＼の聖人達はみな心をそろへて、かのみ國を指し示し、稱め讃へたまふのである。かういふ因縁で、今世尊は、密かに韋提の心を動かして、彌陀のみ國を選ばしめられたものである。而してさうした世尊のお計らひも、も

ごはいへば、阿彌陀如來のお心から出たごころであつたのである。

「世尊よ、さうぞ私に、—これのみが私の願ひであります」

既に韋提希は世尊の御恵により自分の生れ場所を選ぶごころができたので、今度はそこへ生れるに ついての行を教へて下さいと世尊へお請ひ申したのがこの語である。夫人はかうして行を勵み、心を こらして、是非とも往生せねばならぬといふ望みに燃えたつたのである。さてその思惟は、禪定に いたるまでの方便で、極樂のいろ／＼な莊嚴を思ひうかべ、心にたもつて忘れぬごころをいふのである。正 受はその思ひ浮べる心が、だん／＼細かく微になり、遂には全く亡くなりてしまつて、たゞ禪定の 心だけが對象と合して、そこにあらはれるのをいふのである。このごころは下へ行つてからくはしく述 へるごころしよう。

六 散善のおこり

「その時世尊は微笑を洩らされたが、—阿那含の位に入るごころができた」

既に韋提希は、はじめに極樂へ生れたいごころが、更にそこへ生れるについての行を説いて下さい ませと請うたごころであるが、この請ひが世尊の本心に稱ひ、なほまた、阿彌陀佛のお誓ひの御意をも 顯すごころになるので、この二つの請を因にして、廣く淨土の門を開いたならば、たゞ韋提希ごころが往 生するばかりでなく、未來の人々もこれを聞いて、みな、かのみ國へ生れるごころになるであらう。か う思はれたから世尊は、ごころに微笑を漏らし給ふたのである。そして光明を放つて、父の王を救はれた のである。一體佛の光明は、その御身より出づる所に從うて、それ／＼異つた利益があるのである。 足から放たせられる光は地獄道を、膝から流れ出づる光は畜生道を、陰藏の光は餓鬼道を、臍の光は 修羅道を、心の光は人道を、口の光は小乗の人々を、眉間の光は大乗の人々を照らさせられて、それ 々利益を施されるのである。だから今、王もみ口の光を頂に受けて小乗のさきりをえたのである。 もし眉間から放たせられた光明が、再び佛の頂にかへつたならば、それは菩薩にさきりのしるしをあ たへられたごころなるのである。さて弊婆娑婆羅王は頂に受けた世尊のみ光で、自然に心の眼がひら け、一室に閉ざされながら、はるかに世尊を拜みたてまつるごころができたので、その事の意外なるに うちおごろき、敬ひをつくして歸依し、小乗の第三位の證果をえたのである。

「ごきに世尊が韋提希夫人に告げらるゝやうには――いろいろの方便を説き示すであらう」

これはさきに、韋提希夫人が極樂へ參るについての行を教へて下さいと請ふたのに答られたお語である。世尊は耆闍崛山から姿を消して、王宮へあらはれたまうてから、こゝに至るまでは、黙然として、お坐りになつたきり、まだ一言もお説きにならなかつたのであつた。たゞ、その間、韋提希夫人が懺悔したり、またいろいろの請ひを申し立てたり、世尊が光を放たせられて、佛達の國々を現はして見せられたりしたごきなきが説いてあるばかりである。そしてこれ等の記事は、阿難が佛のお伴をして王宮に居たごき、見たり聞いたりしたごきを、後で耆闍崛山へもぎつてから、そこに集まつてゐる人達に話したごきを記したものである。然し今までも、世尊のお語が全くなかつたわけではなからうごも思はれぬではない。

「阿彌陀佛はこゝを去るごき、程遠からぬごころにゐられる』といふのは、まづ觀を行めるについて、その對象にならせられる阿彌陀佛を擧げて、そこに行める者の心を注めしめやうご思召しから、阿彌陀佛は』ご仰せられたものである。』程遠からぬごころにゐらせられる』といふには、三ごほりの意

味がある。その一はこの世界から十萬億の佛の世界をすぎたごころが、彌陀の御國であるから、決して遠いごきはないといふごき。その二はよし道里が遠いにしても、そこへ去く時は、一念の間に行かれるから、遠いごきはいはれぬといふごき。その三は韋提希も末の代の衆生も、心を凝らして、阿彌陀佛や、その御國を思ひ浮べるごき、それ等のもろ／＼のお相が心の中へ現はれさせられ、まのあたりに拜みたてまつるごきができるから、これまた遠いごきはいはれぬといふごきをのべさせられたものである。

「念ひを西方淨土にかけ』といふから下は、凡夫は障りが深うて、非常に心が散りみだれるものであるから、もし手早くその亂れ心をすて去るまいならば、極樂淨土が心の中へ現はれ出づるよしがないので、世尊は韋提希に對して、心をおちつけ、想ひをこらしめめる方法を教へられたものである。そしてこの方法によつて行を全うしたものを、淨けき業のしあがつた人ご名けるのである。

「私は今汝のために、かの安樂世界へ生れるためのいろいろの方便をこかう』といふのは、人の性質がまだ充分にそろはぬので、定善ばかりを説くわけにはゆかぬから、世尊は更にその性質を觀そなはせられて、親しく三種の善事をお説きひらかれるごいふごきを述べたものである。

「汝ばかりでなしに、——西方淨土へ生れえさせよう」

こゝは末の世の凡夫に、淨き業を修めたがよいこがお勧めになつて、その利益をこかせられたものであつて、韋提希夫人の請ひが、遠く末の世までも利益を及ぼし、いかなるものも心を淨土へさへけたならば、みなそこへ生れるこゝができるこゝいふこゝをあらはされたものである。

「韋提希よ、かの極樂淨土に生れたいこ欲ふものは、——正しい原因なのである。」

こゝが正しく三種の善事を教へすゝめられたこゝろである。すべて人々の生れつきは、定こ散この二つに分つこゝろができる。だからもし世尊が定善ばかりを説かせられるこゝ、定の機のものには救はれるが、散の機のものには洩らされるこゝいふこゝになるので、世尊はその機のものゝために、特別な方便をもつて、三種の善事を説きひらき、心の散り動く生れつきのものをも救はむこせられたのである。

『父母に孝養をつくし』こゝは、すべて生命あるものは、みな縁を藉りて生れるのであつて、或は變化か

ら生れ、或は濕氣から生れ、或は卵から生れ、或は胎から生れるこゝいふ四生があるけれども、いづれもみな父母があつて、大きな恩を蒙つてをるのである。もしこの父がなかつたこゝしたならば、生れる因がかけ、母がなかつたならば、生れこゝろがなく、二人ともなかつたならば、生れる手が、りが全く失はれてしまふのである。だから生れるには、まづ父母こゝいふ縁がそなはらねばならぬのである。さてその生れ出づるまきには、自分の業識が内からの因こなり、父母の精血が外からの縁こなり、この因こ縁この和合して、はじめてこの身を受けるのである。かういふわけがあるから父母の恩が重いこゝいふのである。殊にまた母は兒をやすすこゝ、それから十月の間、行住坐臥にはいつも苦み惱むこゝろであるが、産む時なきは死ぬほごのつらい目にあはねばならぬ。而して幸ひに生みおはつたこゝしても、三年の間こゝいふものは、いつも糞や尿の中に寝て、牀も、夜具も、衣服もすつかりよここれはてるのである。このやうにして成人させてもらつたものが、婦を愛し、兒に親んで、かへつて父母をば疎み憎み、孝養をつくさぬやうなこゝろがあるならば、それはまゝこゝに畜生に違はぬものこゝいはねばならぬ。また父母に孝養をつくせば、この世の最も尊い福德がえられるし、佛を供養したてまつれば、さきりの世の最も尊い福德がえられるのである。

この事について一つの尊い話がある。釋尊がまだこの世にましますときであつた。ある年、非常な飢饉で、人がみな餓え死ををし、白骨がいたるところにちらばつてゐた。だから世尊のお弟子達が食物を乞うてまはられたけれども、それを得るは非常な困難なことであつた。釋尊もまたお弟子達が立ち去るのを待つて、たゞひきり、町に入らせられ、朝から日中まで家毎々の軒端に立ち、食物を乞はせられたが、それをまるらすものにてはひきりもなかつた。そこで鉢を空にしたまゝでお歸りになつた。その次の日も次の日も、かうして何もえさせられることが出来なかつた。そのとき、ひきりのお弟子が道で釋尊にお逢ひして、世尊の御顔を拜むに、世尊の御顔は蒼ざめて常にかはり、飢えてゐらせられるやうに見受けられたので、お弟子は世尊に申しあけるには、

「世尊よ、世尊はもうお食事がお済みになつたのでありますか」

世尊はお弟子に告げらるゝやう、

「弟子よ、自分は二日前から、食物を乞うてまはつてをるが、まだ一匙もえられない。自分はいま、飢え虚いて力がない。それで、おん身も充分に語しをすることができぬのである」

釋尊のこのお話をきいて、お弟子は悲しくなり、溢るゝ涙はせきこめられぬほどであつたが、心に

念ふやう、「世尊を供養したてまつれば、この上もない福德がえられるべきいて居る。また、世尊はもろびきを覆ひ護らせらるゝ世の光である。自分はこの衣を賣つて、一鉢の飯を買ひきり、世尊におすゝめ申し上げやう。いまこそさうせねばならぬときである」を。すぐにそれから衣を賣り、飯を買ひ急いで世尊のみもに到つて、それをさゝけ奉つたのである。するに世尊はかうした次第をしろしめされて、わざとお弟子に問はせらるゝには、

「弟子よ、今年は飢饉で、人はみな餓え死んでをる。それにおん身はここからかういふ雜り氣のない紺色した飯を得て來たのであるか」

よつて弟子はつぶさにありし次第を世尊に申し上げた。するに世尊は再び、

「弟子よ、衣は過去、現在、未來の佛達の幢相である。この衣の因縁は極めて尊く、極めて重くて、非常な恩徳に富んでゐるものである。その尊い衣を、おん身はいま、この飯に代へて、自分にすゝめたのでそのおん身の好心は大いに受けることであるが、自分はこの飯を消すだけの資格がないから、これを食べることはできぬ」

を告げさせられた。よつてお弟子は重ねて世尊に申し上げるやう、

「世尊よ、世尊は三つの迷の世界から供養を受けさせられるに足る聖の中の聖であります。それにもかゝはらず、この飯を消す資格がないと仰せらるゝならば、世尊以外に誰がよくこの飯を消すものがありませうか」

世尊は告げらるゝやう、

「弟子よ、おん身には父母があるか」

「世尊よ、御座ります」

「弟子よ、この飯をもつておん身の父母を供養したがよい」

「世尊よ、世尊すら食べる資格がないと仰せられるのに、私の父母にさうして食べる資格がありませんか」

「弟子よ、資格がある。それはおん身の父母はおん身を生んだので、おん身にみつては大重恩があるからである」

世尊はまた問はせられるやう、

「弟子よ、おん身の父母は佛を信する心があるか、さうか」

「世尊よ、全くありません」

「弟子よ、もう信するこゝであらう。弟子よ、おん身が食物をすゝめるのを見て、非常に歡んで、信心を發すであらうから、まづ佛に教法に僧伽に歸依する掟を授けるがよい。さうしたならば、この飯をたべる資格を得られるであらう」

お弟子はかうした世尊のみ教を受け、世尊の感み深いお心を仰ぎたてまつりつゝ、退き去つた。

以上述べた因縁から考へても、父母に孝養をつくさねばならぬといふこゝはわかるであらう。

また、釋尊の御母の摩耶夫人は、釋尊を生ませられてから七日の後、おかくれになつて、忉利天に御生れになつた。釋尊は後に道をえさせられ、四月の十五日から一夏の間、忉利天に向うて、母君のために法を説かせられたが、これは十月の間、母君の胎をからせられた御恩を報じられたものである。かうして世尊から恩に酬ゆるために、父母に孝養をつくされたこゝであるから、凡夫は猶更のこゝに孝養を怠つてはならぬのである。父母の恩の深くして重いこゝはこれ等によつても知られるのではないか。

次に『師長に仕へ』のべさせられたのは、禮節を習ひ、學識を積み、徳を全うし、行をはげんで、佛に成るまではしばらくも、師や、善き知識の力を蒙らぬこゝはないから、その大恩に對して厚く敬

ひ重んぜねばならぬといふことを示させられたのである。

「慈しみの心から妄りに生きものを殺さず」は、すべて生けるものは、命が本であるから、悪いものに出會へば、怖れ走り、藏れ避けて、ひこへに、おのれの命を護らうとするのである。だから經には、「すべて生命あるもので、壽命を愛でぬものはないから、殺したり、鞭打つたりしてはならぬ。いつも我身をつめつて人の痛さを知るがよい」と説かせられてある。この經を以てその證すべきである。

次の「十種の善き行ひ」は、十種の悪しき行ひをせぬことで、この十善、十悪は下の九品を説かせられてあるところで、廣く説きあかすことしよう。而してこの善はこの世の善事と名けらるゝ所のものである。

然しこの世の善事は、機能が輕微いから、充分な報を感じるこゝができぬが、戒を守る徳は氣高くて、よく菩提を感じるから、人々が佛を信するやうになる。先づ佛の教法に僧の三寶に歸依せしめ、それから次第にもろくの戒を教へるので、それをこゝに「三寶に歸依し、よくもろくの戒律を守り」と説かせられたのである。而してその戒には五戒、八戒、十善戒、二百五十戒、五百戒、

沙彌戒、菩薩の三聚戒、十無盡戒などの種類がある。「威儀を正しくする」といふのは、行住坐臥つねに、戒を守るために、身も口も意も正しくし、もし少しでも過ちがあれば悔いあらためるのをいふのである。

「道を求める心を發し」とは、人々は大乘の道を求める心を起して、決して小き證果を求めてはならぬ。若しも廣くその心を起さないならば、いつまでも菩提を得るこゝは出来ないであらう。それだから人々は「ねがはくば、虚空に同じき身を持ち、宇宙にひこしき心を持ちて生きし生けるものを身をもつて恭敬し、供養し、禮拜し、去き來を送り迎へ、涅槃の岸へ運び渡さう。また口をもつて佛の功德をほめたゝへ、み法を説きのべて人みなを言下にさくらしめやう。また意でもつて禪定に入り、すべての人の生れつきを觀察して、遍く宇宙に身を分かち、人の心に應じて救ひを施し、ひこりも残さぬやうにしやう。そしてこの願が念々に増長し、日々に盛んになり、虚空の如くゆきわたり、限りなくながれて、未來のはてを窮めるまで、疲倦るこゝも厭きるこゝもなく、道を進んでやみすまい」と、勇猛の心を發さねばならぬ。また「道」といふのは佛の果の名で、「心」といふのは求める心をさすのである。

『深く因果の道理を信じ』は、苦の因が苦の果を感じ、樂の因が樂の果を感じることは恰度泥に印を押すやうなもので、印をこり去つても、そこに文がのこるやうに、疑ふことを得ざる事實である。だからこの道理を信するのである。

『大乘の經典を讀誦し』といふのは、經は鏡のやうなもので、しばく讀み、しばく研究すれば、智慧が起りて、この世を厭ひ、涅槃をねがふやうになるから、かう教へられたものである。

『人を勸めて行めしめる』は、苦界の法は毒のごとく、惡の法は刀のやうに、いつも迷へる人々を損ふものである。けれど今述べた所のこれ等の善事は明かに鏡のごとく、正しき道を照らして真理に入らしめ、佛のみ法は甘露のごとく、法雨を注いで、なべてのものを潤し、聖者の流れに合せしむるので、互に勸めあふやうにせよと教へたまふたのである。

『韋提希よ、かやうな三種の事を名けて、淨らかな行業といふのである』等とは、佛が韋提希に對しておん身は恐らくこれを知らないだらうが、實はこの三種の行業こそ、過去、未來、現在の三世の諸佛がたがみな、未だ佛ならせられなかつたときに、これを修行して淨土を建設せらるゝるに至つた正しい原因なのであるといふことを述べられたものである。これは聖者を例に引いて、凡夫を勵まされた

御語であつて。いかなる凡夫でも、たゞひこへに信じ、心を西方極樂に注いだならば、必ず往生することにしこの疑ひもないといふ意味をこゝに表されたのである。

七 定善のおこり

『世尊が阿難に韋提希に告げられるやうには、——淨らかな行業を説き示すであらう』

既に前に韋提希が極樂に生れたいとの請を立て、またそこへ生れる行を教へたまへと請ふた。それに對して世尊は散善のおこりを説かせられたところで、少しのお語を費されたのであるが、今やこゝに來りて、正しく禪定に入る方便を開きあらはさうとせられたものである。このこゝは極めて肝要なこゝであつて、實に深き利益があり、永遠の昔から未だ嘗て聞いたこゝも、説かれたこゝもない方法であるから、如來は阿難に韋提希に、「よくきけよ」を仰せられたのである。そして阿難に向はせられては、自分は今、淨土の門を説き開かうと欲ふから、汝はそれをよく持ち傳へて、一言も遺失つてはならぬと告げさせられ。韋提希に向はせられては、おん身の請ふたみ法を自分はいま説かうとおもふから、おん身はねんごろにき、よく思ひ量つて、諦かに心に會得し、すこしの錯りもないやう

にしたがよいに仰せられたのである。

『未來世のあらゆる衆生』は世尊が教化に臨みたまふのは、いつも沈みきつてをる人々を救はせられやうとの思召しからで、今も慈しみの雲をのべひろけて、生きとし生けるものをば、こころよく潤さうに思召されたものなることをあらはしたものである。

『煩惱の悪賊に悩まされるもの』は、全體凡夫は障りが重く、妄りな愛に深く迷ひこんでゐるから、地獄、餓鬼、畜生の三つの火の坑が足下に在るのにも気が付かず、縁に隨うて行を勵み、それを菩提に進むための資糧としてゐるが、なんぞ知らん、眼、耳、鼻、舌、身、意に集くうてをる賊が、早くも聞き知り、先を争うて、その法財を奪ひこつてしまふから、憂ひ苦しまずには居られないのである。

『淨らかな行業をこき』は世尊が人々の罪を見そなはせられて、懺悔を教へさせられ、たえずその罪を除かしめて、永く清きものこしやうに思召したまふことを述べたものである。また『淨らかな』といふことは、下に説きあかしてある觀じかたによつて、心ひこすちに念佛し、想ひを西方にそぐなれば、次第に罪が除かれて、淨きものこなるのをいふのである。

『韋提希よ、汝はよくこのことを尋ねてくれた』

これは夫人の尋ねが世尊のお意になうたことを述べたものである。

『阿難よ、汝はあらゆる衆生のために説きひろめるがよい』

こゝは佛のお語を持つこと、説くこと、をお勧めになつたもので、この法は非常に肝要なみ法であるから、充分に世に弘めたがよいといふ思召しをあらはしたものである。世尊はさきに韋提希に阿難にむかはせられ、「心をもちつけてあきらかに聞けよ」と仰せられたことであるが、今こゝでは特別に阿難に向はせられて、「よくこのみ法を受け持ちて忘れず、ひろく大勢の人の處で説きのべて、流行せしめたがよい」と命ぜられたのである。

『私の言葉』は世尊は永遠の昔に既に口の邊を除かせられて居らるゝから、世尊のお語を聞くものは自然に信心を生ずること明したものである。

『私はいま、韋提希及び未來世のあらゆる衆生に——不生不滅の道理を説くであらう』

こゝは世尊が韋提希に未來の人々を説くために、觀の方便をさきあらはして、想ひを西方に注がしめこの世を厭ひ、極樂を欣はしめくれたことを説きのべたものである。『佛の力によつて』とは衆生はおのれの罪に障へられて、目の前のこゝが見えず、掌の中はさのこゝろを遠いこゝろに、竹紙一枚の隔たりを千里の遙に思ひこむものであるから、凡夫の手の届かぬ佛達の境界にはこゝも心の及ぶ筈がないので、佛のお力によらずしては、かの極樂をうかがひ見るこゝろはできないこゝろを説きのべさせられたのである。

『明鏡のおもてに自分の面貌を寫すがやうに』といふから下は、夫人及び衆生が觀に入りて、心をこらしてやまないならば、心と對象とが一つになつて、對象がこゝろなくみなあらはれ、そのあらはれるこゝろは鏡の中に物を見るのこゝろの異もないこゝろを述べさせられたものである。

『心に歡喜をおこすから直ぐに不生不滅の道理を説くであらう』といふのは、阿彌陀佛のみ國の清らかな光明が忽ち眼の前に現はれるこゝ、踊躍すにはをれないほどの喜びがおこるから、不生不滅の忍をうるこゝろを明されたものである。而してこの忍はまた喜忍、悟忍、信忍と名けられる。この

忍のこゝろはいまこゝろに説きのべてはあるが、猶未だ韋提希がこゝろの忍を得るかといふこゝろはしめされていないのである。たゞ夫人等にこの利益を欣ばさせ、勇猛精進の心を以て極樂を想ひうかべるこゝろは、忍を得るこゝろを説かせられたものである。この忍といふのは普通の人がうるこゝろのできる利益であつて、普通以上の人でなければ得られぬやうな證りではないのである。

『韋提希よ、汝はこれ凡愚なるものである。——遠いこゝろを見さすこゝろができる』

夫人は凡夫であつて、聖者ではないから、自らの力では淨土を見奉るこゝろはできないが、いま、世尊の聖力によつて、遙かの淨土をみたてまつるこゝろができたのであるといふこゝろに説かれたものである。これは衆生が韋提希を聖者であつて凡夫ではないと思ひ、夫人は實は菩薩が凡夫に姿をかへてあらはれさせられたものであるから、自分達のやうな罪人は、こゝも夫人の如きこゝろは及ばれぬといふが如き疑ひをいただき、自ら恐れ怯むもの、あるのに對し、世尊がこの疑ひを斷たむがために『汝はこれ凡愚なるものである』と告げさせられたのである。

『心想が劣つてゐる』といふのは、凡夫であるから、未だ嘗て大道に志したこゝろがないこゝろをいふの

である。「未だ天眼をえてゐない」こいふのは夫人の肉眼で見るここのでできるこころは言ふに足らぬほごであるから、淨土のやうに遙かなこころはごうして見奉るこごができやうこいふこごを述べさせられたものである。

「諸佛如來には不思議な方便があつて」こは淨い心であつてはじめて見得るこころの淨土の莊嚴は、おん身のやうな凡夫の汚れた心ではごても見るこごができぬ。だから淨土を見るこごができたのは、ひごへに佛の力であるこ、淨土を見た功を佛に歸し奉るこごを述べたものである。

「時に韋提希が、世尊に申し上げるやうには、——かの極樂淨土を拜むこごができました」

韋提希は前に光の臺の中で淨土をおがみたてまつたのをば、自力の力で拜んだやうに思つてゐたのであるが、いま世尊のお示しにあづかつて、それは世尊の方便のお力によつて拜み得たものであるこいふこごを始めて知つたのである。そこで韋提希は世尊の御恩を深く謝するこごもに「世尊が世にましますこごきは、世尊のお力で衆生は西方淨土をおがみたてまつるこごができやうけれごも、もし世尊がこの世を去りたまうた後には、世尊のお力を蒙るこごができぬから、それから後の衆生はごう

したなら淨土をおがみ申すこごができるであらう」こ案じた。それが次の語こなるのである。

「もし、世尊がおかくなされた後の——淨土をおがむこごができるでありませうか」

こごは韋提希が悲みの心から末の世の衆生も自分ご同じく永く迷界をはなれて、安樂淨土へ往生するやうにこ世尊に向ひたてまつりて御願ひ申し上げたこごを述べたものである。全體佛のお慈悲は衆生をさごりの世界へ運びわたし、末の末までも止ませらるごごがないから、その御壽命にも限りがないのである。けれご世がかはり、時が移り、生きごし生けるものごも命が縮まつてきたので、ために世尊は限りない壽命をわざごお縮めになり、人間の年に類して死を示し、世の常なきをしらしめ以て橋慢れるものを救ひ、剛強なものも終には滅びるこいふこごをさごらしめて、すべてを教化したまふのである。そこでこごに「世尊がおかくなされた後」ごかき記してあるのである。

「おかくれなされた後のもろくの衆生」ごは、もし世尊が教化をおやめになつたならば、衆生は歸依するごころを失ひ、あはてふためいて、無暗に走りまはり、必ず六道におちこむであらうこいふごを述べたものである。

「光明を失うて心がけがけはて」は、五つの濁れをあけたものである。その五つの濁れは、一は時代の濁れで、世が末になるに、もろくの悪が増加してくる。二は衆生の濁れで、世の初めには生きとし生けるもの、みなすべて純善であつたが、世が末になるにつれて、十の悪がいよいよ盛んになつて来る。三は偏見の濁れで、自分の悪をば、悉く善と思ひこみ、他人の善をばこきこく悪として却ける。四は煩惱の濁れで、今の時代の人々は腹底に悪を秘して居るから、安心して親しむことができない。そして目、耳、鼻、舌、身、意が皆それら貪り、瞋りにたけり狂ふ。五は命の濁れで、前の偏見、煩惱の濁れから多くの殺害が行はれ、慈悲の心を缺き、孝養をつくさず、恩恵を施さぬので、おのれの命もまた長きを望まれぬやうになつて来る。こきをいふのである。

「五つの苦しみに逼められて」は、生の悩み、死の苦み、老の歎き、病のつらさ、別れの痛ましさを五つの苦しみに逼められる。こきをいふのである。この五つの苦しみに、更に肉身の苦しみ、求めて得ざる苦しみ、怨仇に會ふ苦しみを數へる。こ八つの苦みとなる。そしてこれ等の五つの濁れ、五つの苦しみに、八つの苦しみにまよひのもの、常にもつ所で、彼等はそれがために、いつもせめ惱まざるものである。もしこれ等の苦しみを受けぬ。こいふものがあるならば、それは凡夫ではないのである。

「さうしたならばかの人々は今日の私のやうに阿彌陀様の極樂淨土をおがむこきができるのでありませうか」こいふのは、韋提希が苦しめるものをも舉げて、「これ等の罪業の極めて深いものは佛のお力を蒙らなかつたならば、さうして彼の國を見たてまつるこきができませうか」こ申し上げたこきを述べたものである。

觀經正宗分定善義卷第三

沙門善導集記

正 說

定 善

第一章 日 想 觀

一 告言と勸獎

『世尊は、韋提希夫人に告げられるには、——西方を心に想ひ浮べるがよい』
この經文は世尊が一切衆生に向はせられてのお告げとお勧めのことである。前に韋提希が「彌陀の佛國へ生れたい」とねがい、また「さういふ行をしたならばそこへ生れることができませんか」と世尊にお

尋ねをした。その時、世尊は簡單に定善の行をお聞かせになつたが、機縁がまだ充分しなかつたために定善の行だけでは助からぬものができるので、更に三つの善事を説きひらいて、嘗て聞いたことのない利益を施されたのであつた。ところで世尊はこゝにきて、重ねてまた定善をくはしく説きひらき「このみ法は容易に聞くことのできない尊いみ教であるから、遠く末の世までも傳へたもつて、人々の心を開き悟らしめるがよい」をお勧めなされたのである。

かうして世尊は韋提希及び行末の衆生にむかはせられて、この塵勞の世をはなれて、佛のみ國へ生れやうとおもふものは、よろしく意を勵まして進んだがよいと、告げさせられたのである。「専心に」いふから下は、衆生は識が散り動いて猿猴のまじり、周圍の事物に心がかり、暫くもぢつとして居ることが出來ず、目に觸れるものみなに執着するから、心を三昧に安んずるには、さうしてもすべての縁を捨て、たえず靜寂の境に心を託ねなければならぬ。そこで今外の淨土をかへりみず、直ちに西方を指し示し、そこに念ひを集注せよと教へさせられたのである。かくて身を一にし、心を一にし、廻向を一にし、處を一にし、境界を一にし、相續を一にし、歸依を一にし、正念を一にするこゝができたならば、それを想が成就したといひ、正受を得たとい名けるのである。そしてこの人

はこの世にも後の世にも、心のまゝに解脱をうるこゝができるのである。

二 觀の對象

「その觀想の方法は、——日没の光景を見るがよい」

こゝは觀の對象をしめしたものである。衆生は久しく生死にさまよつて、さうしたならば心が一つどころに安まるかといふことを知らぬから、西方を想ひ浮べよとさし示されても、さう意をもつたらよいかわからない。そこで世尊はその人々のために特別に問を設けて、正しい念のもちかたを教へさせられ、人々の疑ひをこり除かせられたのである。

「その觀想の方法」は、觀に入る方便をあらはししめたものである。生れながらの盲は、日の光を知らないから、いかに教へても日を想ひ浮べるこゝはできない。然しそのほかのものは、たゞひ盲であつても、かつて見た日の光を思ひ浮べて、念を正し、かたくまもつて怠らねば、觀が成就するのである。こゝころがこゝに少しく了解できにくいこゝがある。それは韋提希は前に極樂を見せていたときたいまねがつたのである。それなのに今世尊はそれに對して、心をこらして、日を想ひ浮べ見よと教

へられたのはどういふことか。おもふにこれには三つの理由がある。その一は、人々に極樂淨土を想ひ浮べるのであるといふことを知らしめ、そこに心を集注せしめるために、まづ極樂の方角を定めてお示しになつたのである。夏や冬の時節はさて置いて、春秋二期の彼岸には日が正東から出て、真西に没するので、この日の没るところを真直ぐ西の方十萬億の世界をこえたところが極樂であるから、そこを想ひ浮べるがよいと教へさせられたものである。その二は人々に自分の業障に重し輕しのあることを知らしめやうとの思召しからである。何故かといふに、心をこらして日を想ひ浮べるにはまづ跏趺正座すべきことが教へられてある。跏趺正座とは右の脚を左の股の上に著けて、外に平均させ、左の足を右の股の上に安じて、外に平均させ、左手を右手の上に置き、身をまつすぐにし、口を合せて歯を近づけぬやうにし、舌で上顎をさへ、咽喉と鼻の氣道を通せしめることである。かうして自分のこの身は、地の性、水の性、火の性、風の性からできあがつて居るのであるから、畢竟は、空虚なもので、一つも眞實なるものはないと觀察する。またこの身の地の性であるところの皮、肉、筋、骨なきが、西へ向つて散つて行き、際までいつても、目にこまるものといふては塵一つもないといふこと。またこの身の風の性が東の方の際まで散つて行くも、塵一つも目には見えないといふこと。また

この身の火の性が、南の方に飛び散つて、際の際まで及んでも、見えるものといふては一つもないといふこと。またこの身の空の性は、すべての虚空に一つになつて、目にこまるものといふては塵一つほぎもないといふことを、それ／＼心に想ひ浮べ見る。次にこれ等の五つの性は、實際に於ては存在しないものであるが、識ばかりは、湛然として圓鏡のやうにすみわたり、内も外も明かに照して、清く朗かであるといふことを想ひ浮べる。そうすればそのこき亂るゝ想ひが除かれて、心がだん／＼凝りかたまりてくる。そこで、心を徐々／＼轉じかへて、あきらかに日を想ひ浮べるのである。しからば、利根者はその坐で明かな日の相のあらはれるのを見るこができるのである。そしてその相は錢ほぎの大きなものあれば、鏡ほぎの大きなものもあるが、これもこれも、その相の上に自分の業障の重し輕しを見るこが出来るのである。すなはち障の重い人は、黒雲が日をかかして居る相を見、障の重い人は黄いろい雲が日を障へぎつて居る相を見、障の軽い人は白雲が日を覆ふて居る相を見るのである。これは日が雲にさへぎられて、明かにあらはれるこができぬやうに、衆生の業障が淨らかな心をおほひかくして居るために、心が明らかな相をあらはしだすこができぬためである。それで行者が若しもこの相を見たならば、よろしく道場を嚴飾り、佛像を安置し、清らかに洗浴して、淨

き衣を著け、銘香を焼き、諸佛や一切の賢聖に表白し、佛の形像に向つて、久遠の昔から身三口意
 こで造つた十悪、五逆、四重、謗法、闍提なごの多くの罪をば懺悔せねばならぬ。そして悲しみの涙
 にぬれて深く懺愧らひ、内に省みて心髓に徹し、骨をきりて自ら責めねばならぬ。かうして懺悔し終
 つたならば、また前のまほりの方法で座り、心をおちつけて、対象を想ひ浮べる。もし対象があらは
 れるごきに、前のやうな三つの障りがすつかり除かれ、淨らかな相がはつきり現れたならば、その人
 をば頼かに障をほろほすこのできた人ご名けるのである。さてかやうにして、利根人は一度の懺悔
 で障が盡きるが、そのほかの人は、或ははじめの懺悔で重い障を除き、次の懺悔で軽い罪を除くもの
 もあれば、また一度の懺悔でたゞ軽い罪だけしか除かれぬものもある。これ等の人は次第を追うて罪
 を消して行く人々で、一時に罪滅しの出来ない人達である。既にかくの如くにして自分の業の相を知
 つたならば、よろしく心をつこめはけまして、日夜、憶念し、懺悔をせねばならぬ。たゞ徒に時を
 待ち、處を待ち、縁を待ち、人を待つ可きではない。恰も、沸きたつてをる湯に身を觸れた場合には
 覺えず飛び退るやうに、罪ご知つては、たゞちに懺悔せねばならぬのである。そしてさういう人をば
 最も上根上人ごいふのである。その三は彌陀の御國の種々の莊嚴、光明なごの内外に照りかゞやく

相は、この世の日の相に立ちまさりて、百千萬倍の尊さであるごことを知らしめやうごて、まづ日を
 想ひ浮べしめられたのである。それで淨土の光明の有様を知らない行者達は、近くこの日輪の相を
 みて、行住坐臥つねに、禮拜し、念じ、憶ひ浮べて止まないならば、久しからずして、定けき心が
 こり、淨土の快樂、莊嚴なごを拜むごごができるのである。かういふ義があるによつて、世尊はまづ
 第一に日想觀を教へられたのである。

三 觀察の方法

『まさに念ひを起して端坐し、——形狀になるのを見よ』

こゝはまさしく觀察のしかたを教へられたものである。身の威儀を正しくし、面を西に向け、対象
 をまもり、かたく心を執りたもつて移らしめなないならば、所期むものがあらはれ出づるごいふごごを
 御示しになつたのである。

四 觀の成就

「それを見終つたならば、——これが日想觀であつて第一觀名けるのである」

既に前にも述べた如く心でもつて日を見つめるにあたり、亂るゝ想をこゝめ、周圍のわづらはしさを除き、しばらくもほかへ心を移さないならば、淨らかな相が了然現れるのである。そして禪定の中でこの日を見たる行者は禪定の樂みを味はひ、外なる身心、内なる心心が融け液りて、心も言葉も及ばぬほどの樂みをうるこころであるが、この時、よくおのれの心を引き攝めて禪定の樂みにひたりすぎるこころのないやうに注意せねばならぬ。もしも禪定の樂みを貪る心を起すやうなこころがあるこころの水が動き出して、今まであらはれてゐた淨い對象のすがたが闇くなつたり、黒くなつたり、青くなつたり、黄くなつたり、赤くなつたり、白くなつたり、いろ／＼さまざまに動搖して、終にはれてしまふのである。そこで行者達がもしこの相を見たときは、自分の心に「これ等の動搖はまりないありさまは、自分の心が禪定の樂みに執着してゐるために、念ひが動き出し、淨土のすがたが動搖するのである」を念ふがよい。そして直ちに心を安ちつけ、念ひを正しくして、再び初めから觀をし

なほせば、動搖もやんで、靜かな心がまた現はれるであらう。然も既にこの過ちを知つた以上、最早再び増上して、禪定の樂を貪る心を起してはならぬ。このこころはこれからあまの觀法にもみな必要なこころである。そして日を想ひ浮べて、日を見るこころができたのが、心と對象と一つになつた正しき觀であり、日を観じながら、日を見ずに餘のありさまを見るのは、心と對象とが一致せぬ邪な觀である。畢竟閑き宅では、これ一つにして淨土の相に比べるべきものはないが、たゞ、明かな輝けるすがたのみが、極樂の面影を偲ばすたよりこなるのである。

第二章 水 想 觀

一 地のすがた

『次に水を觀想するがよい。——透き徹り映りあふさまを觀想するがよい』

これからは水想觀の教である。而してまづこゝは極樂の大地の體を示したものである。さて前には罪の相を知らせやうといふので、日を觀想せしめられたが、今こゝで水を觀想せよと教へさせられたのは、さういふ思召しであるのか。思ふにこれ人々が極樂の輝ける相を、この世の日輪の光になぞらへて説かせられたのに順じて、極樂の大地をも、この世の地面になぞらへて高低のあるところである。こゝ考へまいものでもない。そこで闇のこの世で明るいものは日輪ばかりなので、日輪でもつて極樂のつきせぬ暉きをあらはしたのであるけれども、この世の地面は丘やら、坑やらで、高低のないところもいふては少しもない。だからそれは平らかな極樂の大地とは比べやうもないのである。よつてこの世で最も平らかな水をもつて、極樂の瑠璃の大地をあらはされたものである。所がこの界の水は濕が

あつて、輒であるが、極樂の大地もまたそのやうであるかといふに、さうではなく、今はたゞこの界の水の平らかな相と彼の地の高下のない相とを引き合せたゞけである。また水が轉じて氷となる。こゝいふのは、瑠璃の大地の内外にも透き徹るのにくらべたもので、これは彌陀佛が久遠の昔にあらゆる行を成し終り、罪もその習氣も悉くほろぼさせられた結果、かういふ透き徹つた大地を感じえさせられたものである。

然るに經文には心をこらして水を想ひ、水を轉じて氷を想ひ、氷を轉じて瑠璃地を想ひなせよと教へさせられたが、さういふ作法をしたならば、さういふ境界があらはれるのかといふに、まづ身の威儀は前の日觀の中で説いたのと同じ方法を以てするのである。而してそれから水を觀じて禪定の心を得るのであるが、それには始めによく似たものを想ひ浮べるがよい。さうするに安らかに禪定を得るこゝができるであらう。よつてそのとを少し詳しく説かうならば、まづ靜かな場所で一椀の水をこり鉢さきの地面の上に著き、水を盛り上げ、自分は鉢の上に座り、肩間に豆ほごの大きさの白いものを一つ着け、頭を低けて、面を水の上に臨め、一心に水にうつつた肩間の白いものばかりを見つめて、餘へ心に移さぬやうにする。するに初めの間は水を地上に置いた當座だから、波浪がこぼれまらぬので、

面を寫してもその像が見えぬが、そのうちに、だん／＼面がはつきり現はれてくるやうになる。それも初のほきは面の相が定まらず、長い見れば短くなり、寛い見れば狭くなり、見えたと思へば見えなくなるが、極めてこまかく心を用ゐるに、久しからずして、波が微かくなり、動いて居るやうで動かぬやうになり、面のすがたもだん／＼明かに現はれてくるのである。がしかしこの場合、眼、耳、鼻、口などに氣をこられてはならぬ。それかこいつて見てはならぬ氣張つてもならぬ。たゞ身も心も自然のまゝにし、有るを知つて、執着せず、ひたすら眉間の白き處だけを了々に觀じ、正しい念ひでそれをうち守り、外に心を移したり、またほんやりしてゐたりしてはならぬのである。かうして眉間の白き處が見えるやうになるに、心がだん／＼おさまつてきて、水のやうに澄みわたつてくるのである。また行者達が自分の心に立つ波の注らぬありさまを知らうごおもふならば、ひたすら、この水の動、不動の相を思ひ浮べて、心にうつる對象の相を、その明瞭の度合を知つたがよい。さて椀の水が靜かになつたならば、今度は一握の米を水中に投げ入れて見る。さうするに波がおこりて椀一杯に擴がるであらう。そのとき自分の面を水に寫したならば、眉間の白いものが動くにちがひない。そこで更に豆を握んで水の中へ投げ入れたならば、もう一層大きな波が立つて、面の上の

白いものは見えたり、隠れたりするであらう。もし更に裏なきを投げ入れたら、波はいよく大きくなつて、面の上の白いものはもこより、頭も面もみな隠れて現はれぬやうになつてしまふであらう。蓋しこれはみな水が動くからである。所でいま椀にいつたのはこれ人々の身に喩へたもので、水にいつたのはまた心に喩へたものである。波にいふのは煩惱の亂れ心にたぎへ、だん／＼その波がやむこいふのは、もろ／＼の煩はしさをおさへこめて、心一つに凝らすに喩へたものである。また水が靜かになれば對象が現はれるといつたのは、想ひ浮べる心が亂れないならば、想ひ浮べられるところの對象も動くといふこゝはなく、内も外もともに靜かになつて、求める相があきらかにあらはれるといふこゝをしめたものである。さて細かいにしても、麁いにしても、いやしくも想ひがあれば、心の水が動き、心の水が動けば、従つて靜境が失はれるのである。それは恰度細かい塵でも、麁い塵でも、それを靜かな水の中へ投げ入れるに浪がおこるやうなものである。それで行者達は、この水の動も不動のありさまを見て、自分の心のこゝまつてゐるか、居ないかを知り、また對象が現はれるか、さうかこいふこゝを知るがよいのである。

天親菩薩の讚歌にいはいはく、

『かの如來の世界を觀るに
すべて現し世の相に超ゆ
究まりなき大空の如く
廣大にして邊もあらじ』

これ極樂の大地の分量をたへさせられたものである。

二 地下の莊嚴

『下に金剛七寶の幡幢があつて、——一々具さに見ることができない』
こゝは地下の莊嚴を説いたもので、七つのこゝがらが述べられてある。即ちその一は幢は一様に漏れのない金剛からできてをるこゝいふこゝ、その二はそれ等の莊嚴は大地をさへけて、互ひに映りあふてゐるこゝいふこゝ、その三は楞が具さにそなはつてゐて圓くはないこゝいふこゝ、その四は百寶が互

ひに絡まり會うてゐて、その數は塵沙にもこえてゐるこゝいふこゝ、その五は寶から出づる千の光が、はて知れぬこゝろまでかゞやくこゝいふこゝ、その六は光にそなはるさま／＼の色が、他の世界までも照り互り、機に應じて相を變へ、つねに利益を施してやまぬこゝいふこゝ、その七はもろ／＼の光明が綾をなして大地に映るありさまは日輪にこえて、新に往生したものは、俄に見つくすこゝが出来ないこゝいふこゝこれである。
讀じていはく、

地下の莊嚴、無數億の

寶の幢に擎けらる

百寶、八方の面をなす

見れば悟の自然なる

無生の御國、永久にあり

寶のひかり、數知れず
行者、常にそこを想ひ觀ぬれば
魂躍りて西に入らむ

また讚じていはく、

西の御國は寂靜けくて
無爲の樂しみあるまころ
逍遙として囚はれず
有無のさかひを離れたり

大悲、まころに薰りては
法界に遊び、身を分ち

ものをめぐむに皆等し

*神通を現じて法を説き
相好を示して無餘に入る
まころのまゝに變現す
その莊嚴を見るものは
罪まこまゝく除かれむ

また讚じていはく、

いざ去なむ、魔郷には停まらじ
涯しもわかぬ昔より
六つの巷をさすらひて

悉くみな經たれども

樂しきは更になく

愁歎の聲を聞けるのみ

この世のいのち終りなば

入らなむ、涅槃のかの城へ

三 地上の莊嚴

『また瑠璃の大地の上には——境界を分明につけてある。』

これは地上の莊嚴の高くそびえて、しかも勝れてをることを説きあらはしたものである。七寶の池や林は瑠璃の寶地に依り。地はよく池や、臺や、樹を持つてゐる。そしてこれ等の莊嚴は、阿彌陀佛が證りの行を充分に行めさせられた結果、感ぜられたものである。即ち是等の莊嚴の淨く明かなる所以は、漏れない業がその因であるからである。讚じていはく、

寶地の莊嚴たぐひなし

光り、十方に照らしては

寶の樓閣、華の臺

皆おしなべて満ちわたり

色さまざまに雜はりて

玲瓏として量り得じ

寶の雲や、寶の蓋

空にかゝりて覆ふところ

聖衆は奇しく往き通ひ

寶の幡や、幢や

風のまに／＼ひるがへり

善導大師部

光をつゝむ寶樂は

おもひのまゝの音にぞ鳴る

疑ひを帯びて生れつる

そのもの、華の開けねば

掌を合はせ、華に籠るさま

宛ら胎にやこるごころ

法の樂しみ、内に受け

苦しみはつゆ程もなく

障り盡きなば忽ちに

華おのづから開くなり

耳や、眼は精明かに

身は金色にかゝやけば

菩薩、しづかに歩み寄り

寶の衣を授くなり

かくて光のその身にも

觸れなば三つの忍を得

たちまち佛を拜まむご

黄金の臺を降り來れば

法の侶達、迎へ將て

大き會に入らしむる

尊き御顔を仰ぎ瞻て

いと善しニコそ讚められめ

觀經定善義

『黄金の繩』といふから下は、黄金で、まきてる道のありさまをいふたもので、黄金の繩を張つたのに似てをるから、さう名けたのである。けれど敢て黄金の道に限つたわけではなく、あるところではいろくくの寶の雜はつた土地の上に瑠璃の道がついてゐたり、あるところでは瑠璃の道が瑠璃の大地に刻まれてゐたり、また紫金や白銀の地面に白玉の道ができてゐたり、また言葉も及ばぬほどの寶からできて居る地面に百寶の道がついてゐたり、また不思議な寶の道が千萬寶の地上にあつたりするのである。而してさうした道が入り交ひ、入り雜はりて、互ひに照らし合ひ、光を競うて居るのであるが、しかもために少しも亂れるなご、いふこゝにはないのである。

四 空中の莊嚴

『その一つくの寶の中には、——樂器が飾りつけられてゐる』
 こゝは空裡の莊嚴を説き明されたものである。而してこれは六段に分つこゝができる。即ち一には寶から多くの光をはなつこゝ、二にはその相を喻であらしたこゝ、三にはその光が臺と變るこゝ、四にはその光が樓閣と化るこゝ、五には更にその光が華の幢となるこゝ、六にはまた更に樂器となる

こゝこゝこれである。そして地上のいろくくの寶は、一々五百色の光を出し、一々の光は空中へ湧き上りて光の臺となり、一々の臺の中には千萬の寶樓があつて、それく多くの寶で莊嚴せられてをるこゝいふこゝが、説かれてある。『華の如く星の如く月の如く』といふのは、人が識りにくいかと思召す佛のお慈悲から喻を以て説明せられたものである。『臺の兩邊にはそれく、百億の華の幢がある』といふのは、さまざまに色ざられた地面から放つ無數の光明が、一つくくの光明の臺となりて、空中に満ち遍るこゝを述べられたものである。だから行者達は行住坐臥つねにこの想ひをなすべきである。

五 光明の説法

『八種の清らかな風が、——これが水想觀であつて、第二觀と名けるのである』
 こゝでは光明が樂の音と變りて説法する相があらはされて居るのである。まづ八種の風が光から出るこゝや、その風が樂器をうつて音をおこすこゝや、それ等の音が有爲をば、樂しく、淨く、變らず我まゝになるこゝころと思ひ執んでをる人達に、空にして、苦しく、常ならず、我まゝにならぬこゝころであるを教へさすこゝこゝなが説かれて居るのである。

讚じていはく、

安樂國は淨くして

常に垢れぬ法を説き

瞬くひまにもろくの

迷へるものを救ふなり

佛の功德をたふふるに

こころの分別さらになし

大なる功德の寶をば

速かに能く満たさしむ

第三章 地 想 觀

一 觀成就の相

「かやうに水を觀するここから、——これが地想觀であつて、第三の觀名けるのである」

この經文は觀の成就する相を説き明したものであるが、これは六段に分たれる。即ちその一は心に想ひ浮べる對象は一つに限つて、多くのものを概括して想ひ浮べたり、二三のものを雜へて想ひ浮べたりしてはならぬこと。その二はかうして一事物に想ひをこらせば、その事物がまのあたりにあらはれ、やがてその相をはつきり認むることができること。その三は物がはつきり心に現はれるやうになれば、目を閉ぢても開いても、その相がなくならぬやうに堅くまもること。その四は晝も夜も行住坐臥常にそれを想ひ浮べて、睡るときの外は、心に憶ひ持ちてやまぬこと。その五は心を凝らして絶えなければ淨土の相を見るこゝができること。しかしこれには未だ分別の想ひがあるから、「想ひで見ましたがたゞ名けるのである。所がその六はこの分別の想ひがだんく微になつて、遂に全くなくな

る三味の境地をさきり、淨土の微妙な相が眞實にあり、ご拜まれること。これだけのことが述べられてあるのである。まことに彼の國の大地は廣くして邊がないから、寶の幡も無數であつてもろくの珍らしい寶がいろさまさまに輝きわたり、變化きはまりなきものである。よつて世尊は衆生を勸めて、これ等のものに心をこめしめ、つねに想ひ浮べ見よご教へさせられたのである。

二 阿難への告言

『世尊は阿難に告げられるやう、——この大地を想ひ浮べる方法を説き述べるがよい』

こゝは縁に随つてこのみ法をすべての人々に説き述べよと、阿難に告げさせられたことを明した所である。すなはち四段に分れて、一にはこれが世尊が阿難に對はせられての告言であることをあらはし、二には世尊のお語を記憶して、廣く末の世の人達に大地を觀じて得られるところの利益を説き聞かせよといひつけられたことを述べ、三には信受することのできる根機のもので、わが身の八苦、五苦、三悪の苦しみをのがれるために、法を聞いて信じ行めやうごおもふものには、身命を惜まず、急いで説き、かせるべきであるといふことを述べさせられてある。もし一人でも苦しみをのがれて、生死を出

でしむることのできたならば、それを眞に佛の御恩を報じた人ご名けるのである。何故なれば佛達が世に出られて、いろいろの方便をつくし、迷へるものを教化せられるのは、惡を制め、福を修めしめて、人天の樂しみを享けしめやうといふたのではなくて、淨土に生れさせて、無上菩提を得せしめやうがためであるから、人を教へ勸めて淨土に生れさせるものは、佛達の御希望にかなふものだからである。全體人天の樂しきものは、まことに電光のやうなもので、すぐ消え失せ、後には還りて三惡道にしづみて、長き間の苦しみを受けなければならぬものであるから、諸佛はこの樂しみを享けしめやうごはせられないのである。而してこの法を信じ行めることをのぞまぬものを、『清淨覺經』には、『淨土の教門を説かせられるのを聞きながら聞いたやうでなく、見ながら見たやうでないものは、それは初めて三惡道から來たもので、罪障がまだ盡きないために、信仰することのできないのである』と説かせられてあつて、世尊もかういふ人達は、未だ解脱をえられない人達であるといふてをられるのである。またこの經には、『淨土の法門をきいて、身の毛いよだち、悲喜の涙、交々流れるものは、過去當てこの法を修め習うたことのあるもので、それがいま又重ねてこの法を聞いたものだから、歡喜がおこつたのである。それでこの人は正しい念ひで、行を修め、必ず淨土に生れることが出来る

のである』と説かせられてあるのである。以上は第三段の意であるが、更に四には寶の大地を想ひ浮べ、心を凝らすことを述べさせられたのである。

三 地を觀するものゝ利益

『もしこの大地を想ひ浮べるならば、——これ以外の觀じかたは邪しまな觀想である』

こゝは觀の利益を説かせられたものである。而してこれが四段に分れる。即ち一には寶の大地のみを想ひ浮べよと教へさせられて、ほかの事物をば論ぜられないこと、二には漏れを離れた寶の大地を想ひ浮べたものは、能く久しき間の罪の漏れを除かれること、三には身の終りには必ず淨土に生れるべきことを明されたこと、四には正しき念ひから因行をして、夢にも疑ひを雜つてはならぬこといふことを説かせられたことである。もし人がこの教にそむいて疑を懐いたならば、淨土に生れてからも、華の中に含まれて、すぐには出るこゝができません、或は國の邊界に生れ、或は胎の中のやうな宮殿に墮されるのである。たゞ大悲菩薩が開華三昧に入りて疑を除いて下されるので、華につままれた宮が開かれ、外へ身を顯すこゝが出来、法侶に手を携られて、佛の會座に遊び

得るに至るのである。

さて以上述べた如く心をこらして寶の大地を見るならば、これまでの罪徳が減ぶるばかりでなく、阿彌陀佛の願之行が既に圓かに成就したる結果、命終れば必ず極樂へ生れることに疑ひはないのである。かういふ勝れた利益があるから、更に觀じ方に正しいのこゝ、邪しまなのこの區別のあることを知らしめられたのである。

第四章 寶樹觀

一 觀の方法

『世尊は阿難に韋提希夫人に告げられるには、——行樹のさまを想ひ浮べる』

これからの叙説は寶樹觀で、こゝは觀の方法を教へられたのである。全體彌陀のみ國は廣闊くして邊がないから、寶の樹林は七行位ではない筈である。それなのに今經文に『七重の行樹』といふてあるのは、さういふわけであらうか。思ふにこれは七行位の並樹といふのではなくて、一本の樹でも根が黄金、莖が紫金、枝が白銀、條が珊瑚、葉が珊瑚、華が白玉、草實が眞珠といふやうに、七つのものが具はつて居る樹の並樹といふことである。而してそれ等の樹も、たゞ一つの寶からできてゐるものもあれば、また二三の寶からできてゐるものもある。なほまた、それ以上百千萬億の寶からできてゐるものもある。これ等の事は、『彌陀經義』の中に既に廣く述べておいたことである。

『行樹』といふのは、彼の國の樹林は非常に多いけれども、行行行が整然として居て、少しも亂れ

てゐないといふことをあらはしたものである。

『行樹のさまを想ひ浮べる』とは、未だ眞の觀を閉めぬので、思ひのままに觀するこゝができぬから、假りに想ひを凝らして、心をこゝめ、遂に利益を證るに至るこゝを述べさせられたものである。

二 無漏の樹

『一々の樹の高さは八千由旬』

これは樹の體量を明した語である。すべてこれ等の寶樹は、みな阿彌陀佛の漏れを離れたお心から流れ出たものである。而して佛のお心は漏れがないから、従つてその樹もまた漏れを離れてゐるのである。

天親菩薩の讚歌にいはいはく、

『大なる慈悲のこゝろは
穢れなき善より成る』

物みなは光に満ちて

日月の輝くにまがふ』

猶一々の樹の高さは三十二萬里である。而してその老いることも、枯れることもなく、また小生きのものもない。さうかこいつて初めは小さいのがだん／＼長くなるこいふこともなく、生へるこ同時に大樹となつて、これもこれも齊しき高さになつて居るのである。何故かこいふに淨土は漏れのない世界であるから、生れるこいふここや、死ぬるこいふここや、次第に延びるこいふやうなここはないからである。

三 樹々の飾り

『そのもろ／＼の寶の樹は——寶珠を以て映飾してゐる』

これは樹々が色々に飾られて居る相を述べられたものである。而してこれが四段に分れる。即ち一は林の樹の華と葉とが雜はつて居て同じからざるここ、二は一つ／＼の根・莖・枝・條・葉なきが

皆諸の寶を具へて居るここ、三は一つ／＼の華と葉とが互に同じくなく、瑠璃の中からは金色の光を出すなき、かたみに相雜はつて居るここ、四は更に一切の雜寶を以てこれを飾りたてゝ居るここ、これである。

天親菩薩の讚歌にいはいはく、

「珍寶もて飾りたる

妙なる莊嚴をそなへたり

垢れもあらぬ光り、熾んに

朗かに世をこそ照らせ』

また讚じていはく

彌陀の御國は淨らかに

觀經定善義

寶の樹々の澤にあり
四面の條を垂れさけて
天衣をそこに懸けめぐる

寶の雲の蓋を成し

化鳥は聲をつらねつ、

御空に臨み、舞ひたちて

法の音、奏で、會に入る

他方なる聖衆、その音をば

聞きて心の開かれつ

本國なる人はその形

見てぞ悟を開くなる

『その寶樹の上は——果實の一つくを明了に想ひ泛べるがよい』

こゝに華の上に實が結ばれてあるこいふのは、法藏菩薩の深き計らひによるものである。

『これが寶樹觀であつて第四觀を名けるのである』

こゝは結びぎめのところである。以上述べたやうに、寶の樹が暉をつらね、網が空殿にかゝり、華が千の色をなし、果實が他の國々を現し出すなき、實にえもいはれぬ不思議である。

第五章 寶池 觀

一 寶池觀の意義

『次に極樂淨土の寶池の水を觀想するがよい』

既に前に述べられてあるやうに、寶樹はまことに立派であるけれど、猶その上に池がなかつたならば、未だ莊嚴が充分に出來たものといふことが出來ない。なぜかといふに、もし池がないといふと、極樂淨土に空き地ができるばかりでなく、莊嚴に不足を生ずるからである。それで今、寶池のありさまを明かにして、それを想ひ浮べしめられるのである。

二 八つの池

『淨土には八個の寶池があり、——引かへして尋つて居る。』

こゝは極樂にある八個の池の光景を叙べられた所である。即ち淨土の寶池はみな七寶でできてゐて、

その光が水に徹き透り、水の色が七寶の色にかゝやくから、この水を寶水と名けるのである。そしてこの水には八つの功德がある。所謂一、清淨らかで潤ひと澤みがあり、二、その香に臭みがなく、三、觸つて見るに、軽い感じがし、四、冷やかで、五、軟かく、六、味ふて見るに美しく、七、よく口に調適ひ、八、飲んだあみに患ひがないといふのがそれである。猶この水は如意珠から流れてゐるから、また如意水とも名けられるのである。

極妙に樂く莊嚴られし

安養國にみちわたる

八つ功德のたから池

暉を含むその岸は

七つの寶のり間へ

池に盛られしその水は

色明かやはらかに
寶の光うつすかな

いご徐に歩みきて

寶香を散らす菩薩達

その香は寶雲や寶蓋となり

空にそびえて寶幢を覆ふ

寶幢、嚴儀に、寶殿をめぐり

寶殿の小鈴の玉の網

寶網より出る寶樂は

千々の調を奏でつゝ

寶の宮樓を讃めまつる

宮樓に佛の集會あり

數量りなき聖衆

そこに思量を凝らします

願ぎらくは、いざ縁の人よ

常にこゝろに忘れずて

いのちの終り、みなごもに

かの法堂に生れなん

三 水の調へ

「それから起る微妙な音聲は、——或は諸佛の相好を讃め嘆へる」
こゝでは水に不思議の徳のあるこゝろが明かされてある。すなはち、華を縫ふ寶水の微波が觸れ合ふ

て出る聲の妙なる注の調をなすこころや、更にその水が岸を上り、樹の枝、條、華、果を尋ねて、或は上り、或は下り、途中で相觸れては妙なる聲を出し、その聲がまた、生けるもの、苦しみを説き、菩薩の慈悲を目ざまし動かして、救済を勧め、或は人天の法を説き、或は聲聞、縁の法を説き、或は眞理を證つたものや、證らうこのぞむもの、法を説き、或は佛にそなはる三身のさごりの法を説くなごのこころが明かにせられてをるのである。

四光の聲

『また如意珠からは、——これが八功德水の想であつて、第五觀名けるのである』

こころは摩尼珠に多くの神々しい徳のあるこころを説いたものである。即ち珠の中からは金色の光を出し、その光が白寶の色の鳥となり、その鳥の聲が哀れに雅やかで、天の音楽も比へむやうなく、それ等の鳥が音を連ねて、ひそしく念佛、念法、念僧を讚嘆へるこころである。全體佛は衆生にみつてはこの上もない大師匠でまします。だから常に衆生を邪しまた所から除いて、正しい道に向はしめさせられる。また法は衆生にみつてはこの上もない良藥である、だから能く

煩惱の毒病を消し滅ほし、清淨らかな法身をえさしめる。更にまた僧は衆生にみつてはこの上もない福田である。だから能くこれに心を傾けて供養すれば、自然に證りの結果を生むこころが出来る。いま寶鳥が佛、法、僧を念ぜよといつて讚めまつてるのは、畢竟この所以である。既にかくの如く、この寶珠は前に八つの味ひある水を出し、いままた金色の光を放つたこころである。然しこれは單に闇を破り、昏を除くがためばかりではなく、到るこころに佛の事業を施すのを以てその目的として居るのである。

第六章 寶樓觀

一 寶樓觀の意義

『またいろくの寶でもつて飾られた國土の、——念佛、念法、念僧のしらが流れ出る』
 以上述べられたやうに如何に寶の水が流れ注いでても、猶寶の樓閣がなかつたならば、精妙なる莊嚴であるといふことが出来ない。よつて今こゝにこれ等のものが悉く備はつて居て、淨土の莊嚴をこゝのへてゐるといふことを示されたのである。天の伎樂といふのは、樓閣の中の莊嚴であり、次の樂器が虚空に懸つて居るといふのは、樓閣の外の莊嚴である。實に寶樂は空に飛つて、法の響を流し、晝夜六時に、天の寶幢の如く、思なくして、自然鳴るのである。そしてこれ等の樂の音はまた識なくして、念佛、念法、念僧の法を説く能きをそなへてゐるのである。

二 觀の成就

『この觀想が成就したならば、——これ以外の觀想は邪しな觀想である』
 こゝは觀の成就した相をこかせられたものである。即ち心を専らにして、對象に集注し、寶樓が見えるやうに願うて、一すぢに己れを忘れ、念ひを凝らし心を動かさないならば、上に説いたやうな寶樓も、寶地も、寶池もみなまのあたりに現はれて來るのである。かくてかやうに示された方法のまほりに觀察するときは、障りが除かれ、多劫に身は清淨まりて、佛のみ心にも應ひ、命終れば必ず次の世に於て極樂に生れるこゝが出来るのである。

第七章 華座觀

一世尊の告言

「世尊は阿難三章提希夫人に告げられるには——このわけを説き弘めるがよい。」

こゝは世尊が阿難三章提希の二人に對して、華座の觀法をこかせられたところである。即ち正しい念ひから行をなし、一すぢに心を凝らして念じたならば、罪も苦しみも悉く皆除かれるといふことが示されてあるのである。そしてまた、この觀法は迷ひに没みきつてゐるものを、急速に救ふ法であるから、妄りな愛に心を狂はし、六道に漂ひ流れてゐる人達に、よく説きかせ、普く解脱に昇らしめるがよいと勧められたことを叙説したものである。

二 阿彌陀佛の出現

「世尊はこのことを説かせられたときに、——百千の閻浮檀金の色にも比べることができなかつた」

こゝは正しく娑婆の化主たる釋尊が、迷へるものを救はむこの思召しから、人々に西方極樂に想をかけよと勧めさせられたのをば、安樂世界の慈悲の阿彌陀佛が知ろしめして、東の空なるこの世に、影をあらはさせられたといふことを明かにしたものである。そして阿難三章提希に對はせられて、苦惱を除く方法を説き示すやうに告げさせられた釋尊が、直接に何等の御說法もなく、かへつて思ひもかけぬ阿彌陀佛が、まのあたりあらはにその御杵を現せられたといふことは、畢竟釋尊三阿彌陀佛のおこゝろの一つであることを示されたものといふべきであらう。たゞ衆生の生れつきには、いろいろのものがあるから、或は隠れ、或は顯はれて、御說法をなさるゝといふ異ひはあるが、この二尊が互に對となり、匠になつて、衆生を導きたまふ、その眞精神には毫末の異りもないのである。

次にこの經文を解釋すれば、これは七段に分れる。まづ初めは世尊が阿難三章提希に對はせられて告げ勧められた時をしめし、二には阿彌陀佛が世尊の聲に應じて、たゞちに現れさせられ、章提希が往生するといふことを證されたことを述べ、三には阿彌陀佛が空中に立ちたまふたのは、ひこへに心をひるがへして、正しい念ひになり、我國へ生れたいと願ふものは、立ちこゝろに往生せしめやうといふ意味をお示しになつたものであるといふことを説いたものである。こゝろがこゝに一つ注意せね

ばならぬことがある。それは阿彌陀佛が韋提希のまのあたりに、その御相をあらはさせられたこといふことに關してである。せんたい、佛は尊く高い御徳をそなへてゐらせられるから、輕々しく、み足を擧げ、身を動かせられる可きではない筈である。よし、御自身の本願を捨てやらず、大慈悲の御心から衆生の前に現はれさせられたにしても、端正に御坐りなされたまゝ、そこへ現はれさせらるべきであらう。それなのに今さういふわけがあつて、立ちながら韋提希のまのあたりに現はれさせられたのであらうかといふことである。蓋しこれには如來の深い思召しがあるのである。一體この娑婆は苦しみの世界で、いろ／＼の惡が集まり住み、もろ／＼の苦がたがひに燃え立ちて居る處である。ためにやゝこもするに、反逆が起り、さもなければ笑ひを含んで詐り親しむなご、眼、耳、鼻、舌、身、意のあらゆるところに賊が巢くふて居て、人々の心を害ふから、人々はみな、三惡の火の坑へむかつて、走り入らうとしてゐるのである。それであるから、若し、足を擧げ、身を動かして、この迷へるものを救はなかつたならば、業の繫にしばられて、地獄の牢に陥入るものは、さうしてその難をまぬがれることができやう。かういふわけがあるから阿彌陀佛は立ちながら、陥ち行く人々を撮み上げて、淨土へ連れ行かうとせられたものである。これ即ちそのお坐りなされたまゝで、韋提希のまのあたりに

へ現れさせられなかつた所以なるものである。

さてその次の四には觀音と勢至の二菩薩が侍者となり、その餘の菩薩達はゐられなかつたことをしめし、五には阿彌陀佛の侍者の二菩薩は身も心も圓かで淨く、光明がはるかに盛んであつたことを述べ、六には阿彌陀佛のおからだの光明は、朗かに十方を照らして、垢れと障りにまみれた凡夫は、まごもに祝奉ることのできぬといふことを説き、七には佛のお身は漏れを離れたまふから、そのお光も漏れを離れてあり、ために未だ漏れのこつてゐる天の黄金も到底そが比べものにはならぬといふことを明されたものである。

『このとき韋提希夫人は無量壽佛を拜み、恭々しく禮拜して』

こゝは韋提希が實に垢れはてた凡夫の女性であつて、本來いふに足らぬものであるが、たゞひこへに、冥から加へさせられた佛のお力によつて阿彌陀佛の現れさせられた時に、首を稽げてそれを拜みたてまつることができたといふことを説き示されたものである。韋提希は既に早く淨土を拜みたてまつりて喜びにあふれ、ほめたゝへたことであるが、いま又正しく阿彌陀佛をおがみたてまつることが

できたので、一層心が深く開けて忍を得るに至つたのである。

三 観の方便

『世尊に申し上げるやうには、——二菩薩ミを見たてまつるごことができませうか』

こゝは韋提希夫人が世尊の御恩に感じて、衆生のために疑問を述べるところである。即ち夫人はその心にいま己れは世尊がおはしましたので、その御念力を蒙りて、阿彌陀佛をおがみたてまつるごことができた。然し世尊のおかれになつた後の衆生はさうして、阿彌陀佛を拜みたてまつるごことができやうかといふ疑問をおこし、これを世尊に問ひたてまつつたのである。

『そこで、世尊は韋提希夫人に告げられるには、——次のやうに観想するがよい』

これは、世尊が韋提希の請を許して、すべての人々に告げたまふお言葉である。ごころがこゝのお語の中には、韋提希夫人ばかりご名指して、衆生ごいふお語がない。これはさうしたごころかごいふに、それはたゞお語が略せられてあるだけであつて、お心には必ずそれがあるのである。なぜごいふ

に、佛が教化に臨んで、み法を説かせられるには、お請ひをせなくても、普く説き弘めたまふものである。所が今は殊更韋提希が未來世の衆生のためにごいふて請ひ、その請ひによつて説かせられたものである。だからごよりそこには未來の衆生をも、その相手ごして説かせられるものなる意の含んで居るごごはいふまでもないごごである。

『先づ七寶の寶からなる大地の上に蓮華があるご想へよ』

こゝが正しくこの観想の方便を教へられたものである。せんたい衆生は心が盲になつて闇んでゐるから、想をごらせばごらす程、ますます勞れてきて、目の前のものごすら冥くなるごごは、恰度、夜歩くものご甚だ能く似て居る。それだごにましても遠く淨土の境地を目標ごしたならば、さうしてくはしくこれを観想するごごができやうかごいふ疑問が生じて来る。なる程、若しもこれを衆生の惑障の深いごごや、念の動き亂れる方面から見たならば、愆んな観想を凝らすごごは畢竟徒に疲れるばかりで、徒爾なごごであらう。けれごもしもそれを遙かに加へさせられる釋尊のみ力を仰いで憑むごしたならばごうか。さうすればごごに淨土の境地を悉く見つくごごができるではないか。然

らばさういふ作法で心をこらし、淨土を見るのかさいふに。まづ佛像の前で、自ら造つた罪を述べ露はし、至心から慚愧し、悲しみ泣いて、涙を流し、過を悔いる。而して次に口にも心にも、釋迦佛や、その他の諸佛達の集まりを請ひ、また阿彌陀佛の本願を心に念じて、次のやうに申し上げるのである。「弟子某甲等は、生れながら心が盲であつて、罪が重いから、僅かのものにも障たけられるのは、理であります。さうか佛達よ、佛達の慈悲深き御心の中へ、私をも受け留め、念じ護つて下さいませ。そして淨土の境界をお示し下されて、この心を開き悟らしめ、觀想の成就するやうに、お力を加へて頂きたうございます。今弟子はこの身も命もみな捨て、仰いで、阿彌陀佛に捧げ奉ります。實に弟子が淨土を見たてまつるのも、見たてまつらぬのも、みな佛の御恩でございます。」

さうして再び至心から懺悔し、それが終つてから、靜かな場所で、西に向うて正しく結跏趺坐し心をこらすのである。その心をこらすことが終つたならば、徐々心を轉じかへて、淨土の大地が色あざやかにかゞやいてをるさまを想ひ浮べるがよい。それも初めは廣い大地を亂雑に想ひ浮べてはならぬ。それでは三昧の境地へ入ることがむつかしいから、たゞ一寸か、一尺ほきの地面を想ひ浮べるがよい。そして或は一日二日三日、或は四五六七日、或は一月、或は一年、二年、三年と晝夜、行、

住、坐、臥の分ちなく、身、口、意になす業を三昧ご一つになるやうにつこめるがよい。然もそれには萬の事をみな捨て、宛がら失意の人や、聾、盲、痴人のやうにしてゐるならば、この三昧をうることは、極めてたやすいことである。もしこのやうにできぬ人達は、身、口、意の業が縁に隨つて轉りかはり、こらし靜めた想ひも、波の如く飛び散りてしまふから、たゞへ千年の壽命を、この行につくしても、法眼の開けるさかひふことはないのである。かくて三昧が心に現はれるときは、まづ明かな相が現はれる。相は即ち實の大地その他の種々の莊嚴のこころである。この莊嚴がはつきり現はれて來ること、實に不思議なるものである。所がこの不思議なありさまを見るさかひふのにも二種あつて、その一は想見さかひひ、まだ知覺があるために、淨土の境地を見るには見るが、それが充分に明了にならないのであり、その二は全く内外の覺へがなくなつて正受三昧に入るものであつて、見る所の淨土の境界が、前の想見に比較して比べやうもないほどのものである。

『その一つ／＼の葉には百寶の色がそなはり、——これ以外の觀じ方は邪しまな觀想である』
こゝは寶の華に種々の莊嚴があることを説いたものである。まづ一つ／＼の蓮華の華にはもろ／＼

の寶の色がそなはつて居るさいふこぎ、次には一つ／＼の葉に澤山の寶の脈があるさいふこぎ、その次には一つ／＼の脈に澤山の光があるさいふこぎが述べられてある。そしてこれ等のこぎを述べられたる意味はごこにあるかさいふに、これ人々に心をこらして、一々これ等のものを想ひ浮べさせ、心の眼で見られるやうにしやうこの思召しからである。既にかうして蓮華の葉が見えたならば、次に葉の間に飾られてゐる寶を想ひ、次にその寶から多くの光が出で、寶の蓋なるこぎを想ひ、次に華の臺ミ、その臺の上のもろ／＼の寶や珠の網を想ひ、次に臺の上にある四本の寶幢を想ひ、次に華の上の寶幔を想ひ、次に幔の上の寶の珠ミその光明ミ色ミが、大空に充ち遍りて、いろ／＼の異なつた相を現はすこぎを想ひ、かうして、順々に一つ／＼心を凝らして止まないならば、久しからずしてこの三昧の心をうるこぎができるのである。而して、三昧の心がえられたならば、彼の淨土のもろ／＼の莊嚴がすつかり顯現れて、明了ミ拜むこぎができる。そこがこの觀想の成就したごころである。

第八章 像

觀

一 佛の慈悲

『世尊は阿難ミ韋提希夫人ミに告げられるには、——それ自らを現はされるからである』

こゝでは諸佛の大きなお慈悲は人々の心に應じて現はれさせられるから、諸佛を觀想したがよいミ阿難ミ韋提希ミに勧められたごぎが述べられてをる。ごころが韋提希のさきの請ひでは、彌陀ミ指してあるのに、世尊はいま諸佛を擧げさせられたのはごういふわけであるかさいふに、これは佛達はいづれもみな、法身、報身、應身の三身をそなへさせられ、ひこしく智慧ミ慈悲ミを全うじてゐらせられるから、ごの佛もその御證りは一つで、少しの異もあらせられぬのである。それでこの點からいへば、諸佛ミいふも阿彌陀佛ミいふも、畢竟一つでましますのである。だから今、世尊は諸佛の名のもごに阿彌陀佛を擧げさせられたのである。そしてこの佛達は身を端正して、一度坐らせられるさいふご、座らせられたまゝ、ごこへでもお影を現はしたまふから、そのお意が衆生へ向はせられるご。

いつでもそこへお影を御現はしになるのである。

次に『法界』といふのは、教化を受ける衆生の迷の世界をさしたものであり。『身』といふのは、教化したまふ身、すなはち佛の御身を指していふのである。そこで佛を法界の身と申すわけを、くはしく説明するに、一、佛のお心は、遍く衆生の世界へ行きわたらせられるといふこと、二、佛のお身は遍く衆りの世界にゆきわたらせられるといふこと、三、佛の智慧には障礙をなすものがないから、よく衆生の世界に、ゆきわたらせられるといふことこの三つの意味がある。お心がゆきわたらせられるから、随つてお身もゆきわたらせられるといふやうに、いつもお身がお心についてまはらせられるから、佛を法界の身と申しあげるのである。

『衆生の心想の中にそれ自らを現はされる』といふのは、衆生が諸佛を拜みたいといふ念ひを起すに佛は直ちにその礙りをなすもの、ない智慧でもつてこれを知ろしめし、すぐにその人の心想の中へ入りこんで、身を現はしたまふといふことを述べたものである。行者達が想念の中や、夢定の中で佛を拜みたてまつるのはみなかうした義があるからである。

二 觀佛の利益

『それ故に汝等、心に佛を想ひ浮べまつるにき、一かの無量壽佛を諦かに觀想せねばならぬ』

こゝは佛を觀想するもの、利益を述べられた所である。凡そ自分の心を引きたて、佛を觀想するに、まづ心に佛を解き、その頂きから足の底に至るまで、一々これを想ひ浮べて、暫くも休まず、或は頂きのお相を想ひ、或は眉間の白毫を思ひ、或は足下の千輻輪のお相を想ふべきである。さうすれば佛のお像が端嚴に了然と顯はれさせられて來る。かうして一つ／＼のお相を心に想ひ浮べるといふに、一つ／＼のお相が現はれたまふことであるが、もし心に想ひ浮べないとするに、そのお相も見ること出来ないのである。すなはち自分の心に佛の御像を想ひ作りさへすれば、その心に應じて佛の御像が現はれさせられる。これを經文に、『この心がすぐに三十二の相好を具へさせられる佛のおすがたである』と申してあるのである。

『この心を離れて佛は在さぬ』とは、自分の信心によりて、佛のお相を想ひ浮べるありさまは、恰度佛を作り出すやうなものであるといふことを述べたものである。

『この心がこれ佛である』とは、心に佛を想ひ浮べるこいふこと、その想ひ浮べた力で、佛の御身が現はれさせられるから、この心がすなはち佛であること申されたのである。だからこの心を離れて外に別な佛をいふてはましまさぬのである。

『かの海のやうな廣い智慧』とは、諸佛の智慧のこことである。諸佛は障礙をなすもの、ない圓かな智慧をそなへさせられ、そのお意を用ゐさせられること否に、かはらず、つねによく法界の心を知りつくさせられるから、その智慧をかくの如く海の廣大無碍なるに譬へて申し上げたのである。而してこの佛達を想ひ浮べること、この佛達はすぐにその想ひ浮べる心の中に現はれさせられるから、いまの經文に『佛達は衆生の心想の世界から生れてくる』と説かせられてあるのである。

ところが或行者達は、この經文を解釋して、これ唯識がそのまゝ、法身であること觀念すること説かせられたものであるといひ。また或ものは生來自らの心性にそなはつて居る清淨な佛性を觀察すること説かせられたものであるといふて居る。けれど今、經文を見つてみるに、佛の御像を觀察せよと説かれてある。そして二十二の杵好を假りに立て、あるから、これ決してさういふ人達の主張するやうな眞如法界の御身を觀察することいふが如きものではないのである。何となれば、眞如法界の御身に

は色こいふものがましまさぬから、縱令それを拜まうと思ふても、拜みたてまつることができない。だからそれが説明のしやうもないためにいつもこれを虚空に喩へ、以てこの法身の御體をあらはしたてまつるのである。かくてこの法身に想ひ浮べるべき相もなければ、また見るべき身もないのである。然るに今この經文に説かせられてある觀法は、もつぱら方角を指し示し、相を立て、そこへ心を集注せしめて想ひ浮べさせるこいふ方法であつて、相を離れ、念ひを離れて觀察することいふ方法ではないのである。まして世尊は罪に濁れた末の世の凡夫では、相を立て、そこへ集注することすら困難であるこいふことを知らしめて居られる。それであるのにその者へ對して、相を離れて、事物を觀察せよと教へさせられる筈はないではないか。若しそんなことを求めらるゝならば、それは恰度、術を知らぬものに、空中で舎を立てよこいふやうなもので、もこより佛の慈悲に悖つたものこいはなければならぬ。こんな所から考へても、これを法身の觀なりとする説の誤りなることは知られるのである。

三 觀の方法

『かの佛を觀想しやうと欲ふものは、—その人はほゞ極樂世界を見たこいふことが出来る』

こゝは佛を觀想するといふが、その觀想すべきもの、何なるかを明かにせられた所である。而して
 そが觀想の方法は、前にもいふ通り、頂から面、肩、毫相、眼、鼻、口、耳、咽、頸、肩、臂、手指
 迄、一つ一つ想ひ浮べ、また心を上の方へ向けて、胸、腹、臍、陰、脛、膝、蹲、足、指、足のうら
 の千輻輪迄、一つ一つ想ひ浮べ、さらに千輻輪から頂へ逆に向ひ想ひ浮べてゆく。かうして或は順に
 觀察をし、或は逆に觀察をして、心をかうしてやまないならば、久しからざるうちに觀想が必ず成就
 するのである。蓋しかくの如く上から觀察するのミ、下から觀察するのミのこの二つ方法は、華座觀
 や寶池觀なごにも、ちるねばならぬ方法である。そしてこの寶池、寶華、金像を想ひ浮べる觀法は、
 十三の觀法の中でも最も大切なものであるから、もし人に觀法を教へやうと欲ふならば、この觀法を
 教へるべきである。その一の觀法が成就すれば、必ずほかの觀法は自然に出來あがるのである。

四 像觀の利益

「これが像觀であつて、第八觀ミ名けるのである。―念佛三昧を得るのである―
 こゝは念ひをこらして、佛像を觀察するならば、現在に利益を蒙るこゝを説き明されたものである。」

全體迷界の人々は障が重いために、なか／＼眞の佛を觀想するまでにはすゝみ難いものである。だか
 ら世尊は哀れみを垂れさせられて、まづ人々の心を形像の上に集注せしめ、それを觀想するやうに勸
 められたものである。

第九章 眞身觀

一念佛三昧

『世尊は阿難に韋提希夫人に告げられるには、光明の中に悉く攝めまつて捨てさせられぬのである』

これからが佛の眞の御身を觀想するところを説き明されたものである。而してこゝには正しくその眞のおん身にそなはる光明の利益が説かせられてある。ところがこゝに不思議なのは、佛の光明は普くすべての人々を照らされるにもかゝらず、たゞ念佛する人だけを光明の中へ攝めさせられるといふことである。ぜんたい、いづれの行にしても、それを佛にさし向けるならば、みな往生することが出来る筈である。それであるのに何故念佛する人だけが光明の中に攝められるのか、蓋しこれには三つのいはれがあると思ふ。その一は阿彌陀佛に念佛する人達の間には、親しい縁があるからである。すなはち衆生が口でいつも佛のみ名を稱へるといふこゝ、佛がすぐにそれを聞こしめし、身でいつも

佛を禮敬むといふこゝ、佛がすぐにそれを見そなはし、心でいつも佛を念するといふこゝ、佛がすぐにそれを知らしめし、また人々が佛を憶念するといふこゝ、佛もすぐにその人達を憶念したまふのである。而してかやうに阿彌陀佛に念佛する衆生とは、身も口も意も、更に相離れず、その間、最も親しい縁があるといふのである。その二は阿彌陀佛に念佛する人達の間には近い縁があるからである。すなはち念佛する人達が佛を拜みたいと願へば、佛はすぐにその念に應じて、そが目の前に現はれさせられるといふほど、近い縁があるのである。その三は阿彌陀佛に念佛する人達の間には増上れてかづよい縁が結ばれて居るからである。すなはち衆生が佛のみ名を稱念へるならば、すぐに永い永い間の罪が除かれ、命の終るまゝには、佛が聖者達にも、その人のまゝに來らせられて、その人をば迎へ接らせたまふから、さういふ邪業も、この人の往生を礙けることができないのである。これを阿彌陀佛に念佛する人達との間に結ばれたすぐれかづよい縁といふのである。かくて慙んな點からいへば念佛以外の行も、こゝより善名けるこゝにはできるが、それを念佛に比べるといふと全く比較にならぬものなのである。だからもろくの經典の中には、處々に廣く念佛の機能をほめたへてある。即ち、『無量壽經』の四十八願の中なごには、専ら阿彌陀佛のみ名を稱へれば往生が出来る

ご説かせられてあり。また、『阿彌陀經』の中には一日乃至七日の間、もつばら阿彌陀佛のみ名を稱へれば往生が出来るといひ、その上、更に十方にまします數限りのない諸佛がたの、み名を稱へる人が往生するといふことは虚はりではないといふことを證明してをられることが出て居るのである。またこの『觀經』では定善、散善を説かせられる中にも、もつばらみ名を稱へるならば極樂に生れることを得るといふことが標し擧げてあるのである。かういふ例は唯如上の二二にござまらない。その他にいくらでもあるのである。以上廣く念佛三昧の旨趣を叙説し竟つた。

二 觀の成就

「その光明、相好、一明かに見たてまつるべきである」

こゝは眞身觀の成就する相を述べられたものである。一體、淨土の莊嚴は極めて微妙であつて、凡夫の境界をこえて居るから、眼のあたりにこれを證り見ることは出来ないけれども、若し觀想をつけさへしたならば、遂には心の眼が開けておがみたてまつることが出来るのである。

三 觀の利益

「もし以上のことを見たてまつ、たならば、一これ以外の觀じ方は邪しまた觀想である」

こゝは佛身を觀想した功があらはれて、利益が得られることから、その觀の正邪の辯別までを述べられたものである。而してそが觀の利益を述べられた所は五段に分れる。即ち觀想によつて、あらゆる佛達をおがむことができたのを第一とし、次いでその佛達をおがむことができたのは、それが取りも直さず念佛三昧の成就したしるしであるといふことを述べ、次に一佛を觀たてまつれば、そのまゝあらゆる佛の御身を觀たてまつることになるといふことをいひ、次に佛の御身をおがみたてまつるから佛のお心をおがむことが出来るといふことを語り、最後にその佛のお心は慈悲そのものでましく、この平等の大慈悲を以て、あまねくすべての人々を攝くんで下されるものであるといふことを説かせられてあるのである。

眞の佛のみすがたの

量さはいさ遙かなり

白毫、五山のまじくにて

響き震へる法の聲

機に随ひ、説き示し

光は迷へる人々を

照らし、沾ほしたまふなり

靈魂宿す諸人の

たゞひこすぢに歸命して

み相をこゝろに浮べつゝ

佛の誓ひに打ち乘れば

ひこしくこもに彼方なる

西のみ國に生れしめます

第十章 觀音觀

「世尊が阿難に章提希夫人に告げられるには、これ以外の觀じ方は邪しまな觀想である」

こゝは觀音菩薩を觀想するこゝを明された一章である。而してこゝに觀音がその御手を以て衆生を極樂へ導きたまふこゝが述べてあるが、これは觀音は慈悲をつかさどれる菩薩で、その御手には慈悲のはたらきがそなはつてゐるから、その寶光にかゝやく御手をもつて、縁ある人々を淨土へ接引きたまふのである。

願は重し、觀世音

十方に影の身を示し

寶の御手の輝光もて

機を導きたまふなり

第十一章 勢 至 觀

一 勢至の三名

『次にまた大勢至菩薩を觀想するがよい。―極樂淨土のそののやうである』

これからは勢至菩薩を觀想することを述べられたものである。而してこの始めの經文は、大勢至菩薩の全身から放たれる光明の御はたらきを説いたもので、まづ、この菩薩の光明に觸れたものは、さういふものもみな紫金の色にかゝやくさいふごとく。次にこの菩薩ごさきの世からの縁のあるものが、この光明をおがむさいふごとく。次にこの菩薩の單なる一の毛孔から放たせらるる光明を拜むだけでも非常な利益があるさいふごとくを示して、人々に渴仰の心をおこさしめ、よろこんで觀想をはげみ、證りをえせしめやうとせられたものである。それから又この菩薩に三つの御名のあることが示されてある。即ちこの菩薩の光明は無漏からかゝりやき出づる御光だから智慧光と名けたてまつり、十方の三つの惡世界の苦しみを除いて、そこに居る衆生を息ませる御用をそなへさせられて居るから無上力

と名けたてまつり、猶かゝる靈徳をそなへて居られるから大勢至と名けたてまつるさいふのである。

二 勢至の威徳

『またこの菩薩の坐らせられるときには、―觀想し終つたさいふものである』

ここに勢至菩薩の威徳のすぐれたことが説かれてある。即ちその威徳としてこの菩薩が坐らせられるときのお相から説きおこし、それが本國を動かす相、次に他方の國土を動かす相、次に上下の國土を動かす相、次に彌陀、觀音、勢至の分身が雲のやうに集まりたまふ相、次にそれ等の分身が空中を満ち塞いで、みな寶の華に坐らせられる相、次にかゝる分身の佛や菩薩がみ法を説かせられて、衆生のところに應ぜられる相が説き述べられてあるのである。

ところがここに一つの疑問がある。それは『阿彌陀經』の中に『彼の淨土の人々は、もろくの苦しきいふてはなく、たゞもろくの樂しきを受けりばかりであるから、極樂と名ける』と説かれてあるのに、いまこの經文を見るに『分身の無量壽佛、分身の觀世音大勢至が現れさせられ微妙な法を説いて苦惱の衆生を教化なされる』と説かれてある。これで見ると極樂にも苦惱の衆生があるやうである。

既に同じく極樂のこころを説いた經典である。それだのにこの二つの經典の間にさうしてこのやうな叙説の相違があるのであらうかまゝいふ疑問である。思ふにこれは縱令言葉の上では同じく苦しいひ、樂いひであつても、その意味に於ては大いに違があるのである。蓋し『阿彌陀經』に説いてある苦しむなるものは、三つの迷の世界の苦しむをさしていふたものであり、この經に説いてある苦なるものは、いまだ全く證りに至らぬ苦しむをさしていふたものである。ぜんたい、苦樂いふこころに就ては二種あつて、その一は迷界の苦樂をいひ、その二は淨土の苦樂をいふのである。即ちその三界の苦樂いふのは、地獄、餓鬼、畜生の三つの惡趣の苦しみ、生老病死の苦しみ、穢れた身があるための苦しむ、會ふて別れる苦しむ、求めて得られざる苦しむ、怨憎に會ふ苦しむなごのよろゝの苦しみ人間や天人の樂をいふのである。そしてこの迷界の樂なるものは樂いふても五欲をほしいまゝにする放逸な樂であるから、自分で自分の身を繫縛り、しばらくも眞實の樂を得しめざるばかりか、却つて大きな苦を受けしむる原因となるものである。所が淨土の苦樂いふのは證らぬさきを苦しいひ、證つた後を樂いふのである。また證りを聞いた人の中でも、智慧の劣つてゐるものは苦であり、その勝れてゐるものは樂である。いまこの經文に『苦惱の衆生を教化なされる』とあるのは、位の低いものを

高い位へ、證りの劣つたものを勝れた證りへ昇らしめて、そのものゝ、所求を稱へさせて下されることを述べられたものである。もしさういふ意味でないとするならば、漏れのない體をもち、慈悲に満ちた用をそなへ、肉の穢れを離れて、常住の生命をたもたせられる淨土の聖人に三界の苦があるといふことになつて、そんなこころは解せられないのである。

勢至の威徳いご高く

坐りたまへば國搖ぎ

菩薩や佛の分身を

雲の如くに集へしむ

集ひたまひし分身は

み法を説きて衆生を利し

永く胞胎をのがれしめ

つねに法界に遊ばしむ

第十二章 普

觀

『次に自分自分の心を西方極樂世界に至らしめて、一つねにその身邊を護らせらるゝのである』
 こゝは普く極樂世界を觀想すべきことを述べられたものである。即ちまづ心を凝らして、自分が淨土へ往生する相を觀想すべきことを叙し、次にその觀想が成就したならば、定にあるときも、定から出て散亂の心にかへつた時も、つねに心を亂さぬやうに注意し、觀想し得た相を憶ひ出して忘れぬやうにせねばならぬ。そしたならば内にもろくの法の樂しみを得るから、心が明淨かになり、外に殺生、偷盜、邪淫の障をまぬがれるから、種々の惡が生じないといふことを説き、終りにこの人は彌陀、觀音、大勢至の三身が護念せらるゝといふことを説かれてあるのである。

群生よ、念をこらし

西のかた、み國の莊嚴

拜まん願へば、つねに

了々に眼にあらはれむ

第十三章 雜 想 觀

『世尊は阿難に韋提希夫人に告げられるには一寶の池の上に在す觀想するがよい』

こゝは一丈六尺の眞像を觀想して、六十萬億那由他恆河沙由旬の眞佛を觀想する方便とし、水を觀想して、寶の大地を觀想する方便とすべきことを説かせられたものである。これは世尊が衆生に境界を易へ、心を轉じて觀想するこゝを教へられたものであつて、池水や華に限らず、或は寶の宮閣の内に、或は寶の樹林の下に、或は寶の臺の中に、或は虚空の寶雲や、華蓋の内に在す一丈六尺の眞像に心を集注して觀想すべきものである。そしてこれ等の眞像はみな六十萬億那由他由旬の佛が現はれさせられたものであるといふ想ひをせねばならぬ。かうして觀想をつゞけるならば、衆生の機と眞像とがよく稱つて、觀想が易く成就するのである。

『前に述べたやうな無量壽佛は、一こても思ひ及ばないであらう』

こゝは觀想する境界が大きくて、觀想する人の心が小さいために、觀想がたやすく成就し難いのを、

世尊が悲傷せられて、一丈六尺の小佛を觀想せよと勧めさせられることを述べられた所である。

『然しながら、かの阿彌陀佛があらゆる衆生を救ひつくさねば、一想ひ浮べるに於てはいふまでもないことである』

こゝでは凡夫の心は小さく狭いから、寛く限りのない佛のお相を觀想しやうとしてみても、あてがなくて、想をこゝめることができぬ。よつてその觀想も成就せぬであらうこの疑問が起る。それに對してこの疑問を氷釋せられたものである。即ち心が小さいから觀想が成就せぬの、佛が大きいから拜まれないのこゝいふやうなわけのものではなく、阿彌陀佛の深い願力にさへすがれば、いかなるものもみな觀想を成就することができるのであるこゝいふのがこゝの叙説の意味である。

『阿彌陀佛は神通力をもつて、一寶の蓮華は既に前に述べた通りである』

この經文のはじめの所は阿彌陀佛は神通力をそなへさせられるから、更に礙けるものもなく、意の隨に、こゝへでも至らせられるこゝいふことを述べられたものである。そしてその『意の如に』こゝいふの

には二種の意味があつて、その一は衆生の意の如にこゝいふことであり、衆生の心に隨ひ、念に應じて救はせられることをあらはし、その二は阿彌陀佛御自身の意の如にこゝいふことであり、阿彌陀佛が肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼の五つの眼でもつて圓かに世を照らし、六つの自在な通力をもつて救ふべき人々の心を觀察し、瞬く間にその人々の處へ赴いて、身には神通を示し、口には法を説き、平等の意をもちりて、衆生の惡業を滅ほし、悟を開かしめ、それ々の利益をあたへさせられることをあらはしたものである。

『この觀世音菩薩と大勢至菩薩とは一これを第十三觀と名けるのである』

こゝには阿彌陀佛と觀音勢至の二菩薩との關係を述べ、この觀法を結んであるのである。蓋し如上の三尊は昔から縁が深く、そのお誓ひも同じくして、惡をたち、菩提に至らせられてからも、互に影の形に添ふが如く、響の聲に應ずるやうに、心をあはせ、相ひ伴れて、十方に遊び、衆生を教化せらるゝこゝいふのである。

以上、日想觀からこの雜想觀に至るまでの十三觀は、韋提希が自ら思惟正受を教へたまへて請ふたの對する世尊の御答である。よつて今これを總じて讚じていはく、

七六 (六六)

日を觀すれば昏闇去らむ

水を氷に想ひなせ

やがて心は淨まらむ

大地をさゝふる金幢は

色あざやかに映りあふ

百千萬に重なれる

地上の莊嚴かしこけれ

寶の雲に寶の蓋

空に臨みて、ひるがへり

人天の音樂は

妙なる響つらねたり

瓔珞垂る、寶の樹

色くさぐさの葉を結ぶ

功德の水を湛へたる

池の流れは華に入る

寶の樓閣あひならび

光は照りて影もなし

彌陀、觀世音、大勢至
華のみ座もたぐひなく

觀經定善義

七七 (六七)

四つの幢、幔を承け
寶の珠は網に張る

迷ひも深き冥識は

心の曉、浅ければ

座しますみ像、静やかに

心を注めて觀ぜしむ

一念、心開けなば

相好、光明も勝れたる

眞の佛を拜み得む

苦しみ救ふ觀世音

世をあまねくも觀るなはし

形を變へて娑婆に入る

勢至の威光、世に震ひ

縁のまゝに照らし護り

彌陀の會に參せしむ

いざ歸りなむ、極樂へ

身を安くに精きところなり

正念を西に向はしめ

華含むてふ想ひせよ

華ひらけなばみ佛の

くしき莊嚴のみ法説く

いみじき聲のそこにあり

惑まごひを帶おぶる人々ひとびとは
眞まことの佛ぶつ、觀かんずるも

その成ならむこゝ難かたければ

寶たからの池いけに立たちませる

金こがね色いろなる丈だけ六むの

尊たうき像すうがた、觀かんぜよこ

世尊せそんは教をしへ給たまひけり

迷まよへる物ものを救すくはんこ

あるは小ちひさく姿すがたかへ

あるは大きおほく現げんすれど

みな金こがね色いろにかゝやきて

寶華ほうげのみ座くらも勝すぐれたり

知識ちしきよ心こころを一ひとすぢに

西にしのみ國くにへ傾かたけて

念佛ねんぶつしはけめいぞこもて

觀經散善義

觀經正宗分散善義卷第四

沙門善導集記

散善

第一章 略解

これから散善を解くのであるが、經文を解釋するに先きだちて、簡單に散善とは如何なるものであるかといふことを説明しておかう。

まづ散善はこれを分ちて二にする。即ち一は衆生を往生せしめる正しい因であるところの三福、二は正しい行であるところの九品である。而してその三福は、第一の福は、世間普通の善であつて、佛法を聞いた、このないものではないが、ひこへに親に孝養をし、仁義を守り、禮を重んじ、智を磨き、信ある行をするものを指していひ、第二の福は、戒を守る善を指していふのである。勿論戒にも人

天、聲聞、菩薩こそそれらの種類があり、またその戒を受けるにしても、具さに受けるのこ、具さに受けないのこの區別があり、またその戒を持つにしても、具さに持つのこ、具さに持たないのこの區別はあるが、いづれもみな、佛に廻向けさへすれば、往生するこができるのである。次に第三の福は、深く因果を信じ、大乘の經典を讀誦するやうな行をするこころの善であつて、大乘の心を發した凡夫が、自らこの行を行ふこ共に、兼ねて人に勸めて、惡を捨て、善き心を持ち、佛に廻けて、淨土に往生せしむる所のものを指していふのである。さてこの三福の中で、第一の福だけを行めて佛に廻け往生するものもあれば、また第二の福だけを行めて、佛に廻け、往生するものもあり、或はまた第三の福だけを行めて、佛に廻け、往生するものもある。その他、猶第一二第三の福を行めるものや、第二三第三の福を行めるものや、三福全體を行めるものやなきがあつて、實に區々である。唯しかし何れにしても、この三福の一つを行めないやうなものは、これを十惡、邪見、不信の人と名けるのである。

次に九品のこは、次第に經文の序を追うて説明するこ、しやう。

第二章 上 輩 觀

一 總 說

上輩の觀を説く前に些か全體の解説を試みるこ、しやう。思ふにこの觀の經文はこれを十一段に分つこができる。即ち、一、世尊のお告命を明し、二、位を辯定め、三、緣あるものを示し、四、三心を往生の因と定め、五、三福を行めるに堪えるもの、堪えざるものを區別し、六、受けるみ法に差別のあるこを示し、七、行をなす時間に延促の異あるこを明し、八、おのゝ修めた所の行を廻けて、彌陀の御國へ生れやう願ふべきこを述べ、九、命の終る時の聖者達の迎へに種々の區別があり、また淨土へ去く時間にも遅し疾しの分ちあるこを述べ、十、淨土に往生してから、華の開くのにも遅し疾しの別あるこを説き、十一、華が開いてから、利益を蒙むるのにも種々の異あるこを示したまふたのをいふのである。

所がこの十一段は、その意義、九品の各々にもそなはつて居るから、大體に於て百番の義があるこ

こゝなるのである。しかし一々、文字に當て、見る時は、それが全然契合するところもあれば、また略されて居て合はないところもあり、顯了した處もあれば、隠されてゐる様なところもある。ために一概にいふことは出来ないけれども、その道理としては九品の一つにこれが具はつて居なければならぬのである。だから修行者の解り易い様に思ふて、今これをこゝへ顯し出したのである。

二 上品上生

『上品上生といふのは』。

この人は大乘を修め學んだ凡夫の中で、最も勝れた善人である。

『もし衆生あつて、かの國に生れたいと願ふものは、必ずかの國に生れることができるのである。』
こゝの所は、先づ始めに縁ある衆生を擧げ、次に『三種の心』から以下は、三種の心は何であるかといふことを辯じ定め、これが往生の正しき因であるといふことを明されたものである。蓋し人々の心に隨ふてそれ々の利益を施される世尊のお意は、深くして知り難い。ために縱令『三種の』

心を起したならば、直ぐにかの國に生れることが出来る。』と説かせられても、その三種の心は何であるかといふことに關しては、世尊おん自ら説かせられない限り、衆生はこれを知ることはできない。よつて今、世尊はこゝにおん自ら問を起し、おん自ら三心の何なるかを答へさせられたのである。所がこの三心は極めて肝要なものであるから、これから稍精細にこれを解釋して、その意義を明かにするにしよう。

第一に至誠心と説かせられてゐるのは、至は眞、誠は實といふ意味であつて、すべての衆生が、身と口と意とに修める安心と行とは、必ずそのむかし阿彌陀佛が永い間に眞實心でもつて作しこけさせられた所のものをもちるねばならぬといふことを説きあらはされたものである。それはなぜであるかといふに、衆生は貪、瞋、邪、偽、姦、詐、なご、いふ數知れぬほどの悪い心がおこりて、毒蛇や毒蝎のやうなものであるから、たこへ身に、口に、意に善き行を行ふても、それは毒の雜はつた善であり、虚偽の行であつて、眞實の業といふことが出来ないものである。然るにかゝる虚偽の心を内に懐いてゐながら、外面に、賢く、善しく、精進さうに振舞ふやうなことがあつてはならぬ。かういふやうなわけであるから、衆生は、よし安心や起行を修めるために、身も心も苦しめ、夜晝

の分ちなく、急ぎ急いで走りまはり、頭上の火を撥ふやうに、勤め勵んだ所が、畢竟その行はみな毒の雜はつた善であり、ためにそんな行を佛に廻けて、彼の淨土へ生れやうと求めたにしても、決して往生するこゝの出来る筈はないのである。一體淨土へ生れるには、そのむかし阿彌陀佛が菩薩の行をせられたまきに、永い間、一念二利那の間の弛みもなく、眞實心でもつて、身に、口に、意に修めさせられた善を、阿彌陀佛が衆生に施され、この施された善が、衆生の極樂へ生れたいと趣求む心となつた所に於て、始めて往生するこゝが出来るのである。而してその施された善が眞實の善であるから、これによつて衆生の生れたいと趣求む心も眞實の心となるのである。だからこれは到底今の如き毒の雜はつた善はくらへるこゝの出来ないものであり、ためにその毒の雜はつた善の往生の因となり得ないこゝは最も明かなものなのである。

さてまた眞實心いふ事に就て、自らをすくふ自利の眞實心他から與へらるゝ利他の眞實心がある。而してそが自利の眞實心にもまた二種ある。すなはち一には眞實心でもつて、自分の惡を制めるに同時に、他人の惡をも隨喜ぶこゝなく、却つてこれを禁め、かつ穢れたこの迷の世を厭ひ捨てゝ、あらゆる菩薩達が諸の惡を捨てさせられたと同じやうに、自分もろくゝの惡を捨てねばならぬと思ひ、

行住坐臥、つねに思ひ続け、また眞實心から、あらゆるすべての善を勤め、他人の善事を隨喜ぶこゝをいひ、二には阿彌陀佛とその淨土を眞實心でもつて、口では讚めたゝへ、身では合掌禮敬ひ、意では思想し、觀察し、憶念し、次にこの迷ひの世のさまざまの苦しみと惡を、眞實心でもつて、口では厭ひそしり、身では輕慢り捨て、意では賤しめ厭ひ、次に生きとし生けるものゝあらゆる善き行をば讚めたゝへ、善からぬ業はこれを敬遠して喜び隨ふこゝのないやうにするこゝをいふのである。次に利他の眞實心は、阿彌陀佛が眞實心から、善からぬ身の業、口の業、意の業を捨てさせられ、身でも、口でも、意でも善き業を行めさせられたその眞實を、衆生の心に受けもちるのをいふのである。かやうにして位の上下によらず、智の勝劣にかゝはらず、人々がみな、阿彌陀佛の眞實を受けたもち、内々外々、明るみと闇とにかゝはりなく、皆眞實であれば往生するこゝが出来るのである。至誠心はこゝの心をいふのである。

第二に深心は深く信する心である。而してこれにも、また二種ある。即ち一には自分は現に罪と惡に濁れた生死の凡夫であり、はて知らぬ昔から生死の海に沈みこんで、絶えまもなく流れ轉び、全くのがれ出る縁のないものであるといふこゝを決定的に深く信するのをいひ、二には阿彌陀佛はそ

の四十八願でもつて、衆生を攝受はせられるから、疑ふことなく、慮むことなく、その願力に乗托りさへすれば、必ず往生するこゝが出来るこゝを決定的に深く信するのをいふのである。

また釋尊がこの『觀經』に三福、九品、定善、散善を説いて、阿彌陀佛こそその國土を證し讚へさせられ、人々に阿彌陀佛こそ其國土を欣び慕はしめられたことを決定的に深く信するのをいふのである。また『阿彌陀經』の中に十方の數限りのない佛達が、すべての凡夫は必ず往生するこゝが出来るこゝを證し勧めさせられたことを決定的に深く信するのをいふのである。

また、この深く信するこゝは、すべての行者等が、心ひこすちに、ひこへに佛のお語を信じて身も命も顧みず、決定的に佛のお語のこぼりの行をなし、佛が捨てしめたまふものはこれを捨て、行めしめたまふものはこれを行め、去らしめたまふものはこれを去るのをいふのである。而してこの人を佛のみ教に隨順ひ、佛のみ意に隨順ひ、佛のお願ひに隨順ふたものこ名け、或は眞の佛弟子こ名けるのである。

またすべての行者は、ひこへにこの『觀經』を深く信じて、行をなすならば、決して人を誤らしむるやうなこゝがないのである。何となれば、佛は大慈悲に満ちた方であり、また眞實を語る方である

からである。佛已外の人達は菩提へ至る行も充分出来あがらずまだく學ぶべき地位にあつて、煩惱の心も去らず、障りも除かれて居らぬ。随つて願ふ所の涅槃もえられないのである。かういふやうな聖者や、學者達は、たゞひ諸佛のみ教のお意をば測量するこゝがあつても、到底充分にこれを究めるこゝいふこゝの出来るものではない。よしたまへく正しく知り究めたこゝしても、必ず佛の證明を請はねばならぬ。そしてその時、もし佛のお意に稱つて居れば、如是、如是こ印可されるが、若しお意に稱つて居なければ、「おん身達の義はまだ充分でない」こいふて印可されないのである。かくてそが印可されなかつた義は、なん等の價值も、利益もあるものでなく、たゞ印可された義のみが佛の正しき教に隨順ふたものであるから、價值も利益があるものこなるのである。こころが佛のお語はさうかこいへば、これこそ正しき教、正しき義、正しき行、正しき解、正しき業、正しき智なるものなのである。それであるから、佛は菩薩の意見であつても、人天の意見であつても、また多數の意見であつても、少數の意見であつてもすべてそれ等の是非を定めさせられるのである。よつて佛の説かせられたお語のみが明了かな教であつて、菩薩なごの語は明了かな教ではないのである。こゝに於てか、私は今つゝしんですべての往生人に勧める。すべての往生人達よ、たゞ深く佛のお語を信

じて、もつばら心をそこに注め、お語のまほりに行めなければならぬ。決して菩薩なごの佛のお意にかなはない説を信用して、佛のみ教に疑をもち、惑を抱き以て自ら往生の大利益を失つてはならぬのである。

また深心は深く信ずることであるといふのは、決定的に自分の信心を打ちたて、教の通りの行をなし、いつくまでも、疑を起すことなく、全然疑を断ちきつて、あらゆる別な解、別な行をなす人達や、異なつた學問や、異なつた見、異なつた執をもつ人達のために、信心を傾動かされたり、たぢろかされたりせられぬのをいふのである。

然しそれにしても、凡夫は智慧が浅く、惑障が極めて深いから、若し、解や行の同じく人達が、多くの經典や論によつて、すべて罪障のある凡夫は往生することができぬものであるといふことを證明し、以て往生人の妨げをしたならば、さうして彼等の妨げを打ち拂ひ、信心を成就し、決定して、眞直に進んで、恐れ退くことのないやうにしたものであらうか。思ふにさういふ輩に對しては次の如くいふべきであらう。「おん身よおん身は經典や論を證據にして、罪の凡夫の往生するといふことはないといふが、自分は決しておん身の言葉を信じない。なぜかといふに、自分もまたおん身の舉

げた所の經典や論を信ぜぬではない。それ等はみな仰いで信ずる。しかしこゝで知らねばならぬことは世尊がそれ等の經典を説かせられた際は、その處も別であつたし、その時も別であつたし、またその聞く人や、利益も別であつた。そしてそれ等の經典を説かせられた時はまた、この『觀經』や『阿彌陀經』や、『大無量壽經』を説かせられた時は異なるといふことである。かやうにそれ等の經典この『觀經』が、その説かせられた時に異りのあるのは、み教を受ける相手が違ふからではないか。すなはちそれ等の經典はみな人や、天や、菩薩の解や、行を説かせられたものであり、この『觀經』は草提希及び佛がおかくれになつた後の五濁五苦にまみれてゐるすべての凡夫のために定善散善をお説きになつた者である。そして世尊はこの『觀經』に於てすべてそれ等の凡夫は極樂に往生することができるといふことを證明せられたのである。だから自分は今、心一すぢに、この世尊の教を信じ、決定して教のまゝに行めたてまつるのである。よつてたごひ、おん身等百千萬億のものが來つて、凡夫は往生することができぬといつても、それは唯、自分の往生するといふ信心を増長し、成就するばかりにしか過ぎない。

また進んでかう説くもよからう。「おん身等よく聽くがよい。自分はいま、おん身等のために、更

に自分がいかに決定し、如何に信じて居るかといふことを説き聞かせるであらう。即ちたゞいふことへ證りに近い菩薩達や、羅漢や、聲聞なきが、十方世界に充ち満つるほご集まり、經や論を證據にして凡夫の往生するといふことはいふことであること告げさせられても、自分は少しも疑ふやうな心を起さず、たゞ自分の清淨な信心を増長し、成就するばかりである。なぜかといふに佛のお語は、決定的に成就したる了らかな道理であるから、なにもものゝためにも破壊せらるゝが如きことはいふからである。おん身等、よく聴くがよい。今また、證りに入つた菩薩達が世界に満ちわたり、聲をそろへて、みな釋尊が阿彌陀佛を讚めたゝへ、迷の世界をそしり、人々に對はせられて心一すちに佛を念じ、もろゝの善事を行ふものは、次の世には必ず極樂に往生することができると説いて、人々を勧め勵まされたのは、凡て悉く虚妄であるから信じ依つてはならぬこと告げさせられても、自分はまた露ばかりも疑を抱かぬのみか、却つて自分の決定した上々の信心を増長し、猶更それを成就するばかりである。なぜかといふに、佛のお語は眞實であつて、決定した明了な道理であるからである。實に佛は眞實を知り、眞實を解き、眞實を見、眞實を證らせられた方である。だからそのお語は菩薩のやうに疑惑の心から語り出されたものではなく、すべての菩薩の異なつた見や、異なつた解のために破壊せられ

るといふことのないお語なのである。しかし眞實の菩薩は、佛の教に違ふ語を述べさせられるはずがないから、もし佛の教に違ふ語を述べさせられた菩薩があるとするならば、それは眞實の菩薩ではないのである。さてそれはさうして置いて、またおん身等は更によく聴くがよい。たゞいふに報佛や化佛が、見渡す限り充ち満ちて、おのゝ光を輝かし、世界を覆ふほどの舌を吐いて、みなそれ〴〵すべての凡夫が心一すちに阿彌陀佛を念じ、ほかの善をつこめ、阿彌陀佛に廻けて往生を願ふならば、みな淨土に生れることが出来るといふ釋尊の教説は全く虚妄であつて、決してさういふ事はないものであること告げさせられたとしても、自分はそれに疑ひを起して、それでは極樂へ往生することができぬのかと畏れるやうなことは少しもないのである。何となれば、一人の佛がすべての佛であつて、あらゆる佛達は、その智も、見も、解も、行も、證悟も、果位も、大慈悲もみな同じく、少しの差別もないから、一佛の禁せさせられることは、すべての佛も同様に禁せさせられるものである。たゞへば前の佛が、殺生等の十惡を數へて、それを禁じ、いつ〴〵までもこれを犯さぬのを十善三名け、またそれ等の惡を行はぬものを十善行三名け、それがすなはち布施、持戒、忍辱、禪定、智慧、精進の六度の行であること説かせられたのを、後の佛が改めて、十惡を行ふのが十善行であること、惡行

を勧めさせられることがないやうに、諸佛はそのお語も行も少しの違ひがないのである。だからいま釋尊があらゆる凡夫に、身のあらん限り、ひこへに阿彌陀佛を念じ、専ら淨土へ往生する行を修むれば、命終つてから必ず彼の國へ生れることが出来る。お勧めにならせられたので、十方の諸佛もまた同じやうに淨土を讚めたへ、同じやうに往生を勧め、同じやうに凡夫が往生のできることを證明し給ふたのである。これは全くいづれの佛も同一なる眞理から現はれ出でさせられたものである。さうばかりでなく、衆生もまた同一の眞理をそなへてゐるものである。だから佛達は衆生の苦惱をそのまゝ、自分の苦惱と思召し、大きな慈悲の心を以て衆生を教化せらるゝ。よつて一佛の教化があらゆる佛の教化であり、随つてあらゆる佛の化益は一佛の化益なるのである。こゝに於てか『阿彌陀經』の中には、初めに釋尊が極樂のいろく、莊嚴を讚めたへ、またすべての凡夫に一日乃至七日の間一すぢに阿彌陀佛のみ名を稱ふれば、必ず往生することが出来る。勧めさせられたことが説き明され、次に恒河の沙の數ほどの多くの佛達が、十方にましくつて、一樣に釋尊が、五濁、即ち悪い時、悪い世界、悪い衆生、悪い見、悪い煩惱に染まつた惡邪な、無信者の盛んな時に於て、よくも阿彌陀佛のみ名を讚めたへ、それを稱ふれば必ず往生することが出来る。こゝを衆生に勧め勵まさせられ

たものである。こゝいふて、釋尊を讚せられたことが説き明されて居るのである。またその『阿彌陀經』には十方の諸佛が釋尊御一人の説では、衆生が信じないかも知れぬ。こゝいふ畏れから、みな一樣に心をそろへ、三千世界を覆ひつくすやうな大きな舌を出して『汝等、衆生よ、汝等は宜しくいま釋尊が説き讚め、證されたまはころのこのみ法を疑ひなく信するがよい。すべての凡夫は心を一すぢにして、一日なり、七日なり、或は一生涯なり、もつばら阿彌陀佛のみ名を稱へるならば、罪と福との多少によらず、またみ名を稱へる時間の長短にかはらず、必ず往生することが出来る。そのこゝに少しの疑ひもない』と誠をこめて釋尊の説を證明して居られるのである。かういふやうに、一佛の説かせられたことをば、あらゆる佛達が證明なされるのを見ても、一佛の説はそのまゝ、すべての佛の説である。こゝいふことがわかり、従つて一佛がそのまゝ、あらゆる佛でまします。こゝも明かになつてくるのである。それであるから自分は一すぢに釋尊のみ教を信じて、往生を願ふのである。』

以上述ぶる所、これを人に就いて、信心を立てる。こゝいふのである。

次に行に就いて信心を立てる。こゝを述べやう。それに就て、まづ行。こゝから説明するに、行には、正行と雜行との二つの種類がある。その中で正行とは、もつばら淨土に往生することを

説き明してある『大無量壽經』、『觀經』、『阿彌陀經』にもこづいて、行をなすのをいふのである。即ちその行は、一、心を一すぢにして、もつばらこの『觀經』、『阿彌陀經』、『無量壽經』を讀誦し、二、心を一すぢにして、もつばら淨土の阿彌陀佛とその國土の莊嚴を思想し、觀察し、憶念し、三、心を一すぢにして、もつばら阿彌陀佛を禮み、四、心を一すぢにして、もつばら阿彌陀佛のみ名を稱へ、五、心を一すぢにして、もつばら阿彌陀佛を讚めまつり、かつ供養したてまつることをいふのである。ところがこの正行がまた二つに分れて、その一は心を一すぢにして、専ら阿彌陀佛のみ名を稱へ、時間の長し短しにかゝらず、行住坐臥つねに續けてしばらくも息めずに行めるのをいひ、それをば往生の正しき業と名けるのである。なんとなれば、この業こそ阿彌陀佛の本願に順ふた業だからである。その二は稱へる行以外の讀誦したり、觀察したり、禮拜したり、讚嘆したり、供養したりする行をいひ、それをば念佛を助けるための業と名けるのである。

かくてこれ等の往生の正しき業である念佛と、念佛を助けるための業を除いた以外の善事は、悉くみなこれが雜行と名けらるゝものなのである。そしてそれが念佛と念佛を助けるための業とを修めるものは、心がいつも阿彌陀佛に親しみ近づいてゐて、阿彌陀佛を憶ひ出すところが斷えぬか

らその業をば無間と名けるのである。けれど後の雜行を行めるものは、それを廻向けて往生するところはできるが、阿彌陀佛を憶ふところが斷ちがちであるから、その業をば疎雜の行と名けるのである。

第三に廻向發願心とは、昔から今まで、自分が身三口意に修めた世間一般の善や、出世間の宗教的な善、及び他の人々のあらゆる善を隨喜ぶ善の、かゝる自他の善をば眞實に深い信仰心から、阿彌陀佛に廻向けて、彼の國に生れたい願ふのをいふのである。

所が廻向發願して彼の國へ生れむとおもふものは、必ず阿彌陀佛が眞實心でもつて、廻向へて下される願心を受けたてまつらねばならぬのである。そしてその廻向へて下される願心は、そのまゝ決定して衆生の心の中に、往生を遂げ得られるといふ確信となつてあらはれさせられるのである。この確信の深い心は、金剛のごとく、あらゆる異つた見、異つた學問、別な解、別な行をして居る人達がおのやうに説きかけてきても、そが動亂せられることも、破壊せられることもなく、一すぢに決定して、すべてを阿彌陀佛にまかせ、正直に進んで、決してそれ等の人の語を聞いたがためにためらふたり、怯えたり、氣をかねたりして、道をふみはずし、往生の利益をこり失ふやうなことがないの

である。

然しかうはいふもの、若し解や行のちがつた邪難な人々がきて、信心の人を誘惑し、亂さうこ企て、色々な往生に對する批難を試み、そが往生の出来ぬことを語り、おん身達のやうに遠い昔から今に至るまで、身三口意で一切の人々に對して犯した十惡、五逆、四重、謗法、無信、破戒、邪見等の罪を負ひ、今日未だその罪を除くことの出来ないものが、さうしてこの一生の間、行めた位の善行や、念佛で以て、彼の濁れない無生の國へ往生し、證悟をうることができやうか。おん身達が造つたそれ等の罪は、實におん身達を三界の惡道へ引きこむ綱であるといふことを知らないのかと嚴しい語をもつて、突きこんできたならば、さうそれに答へるべきであらうか。思ふに慙なものに對しては次の如く答へたらばよいであらう。

「ぜんたい諸佛の教へさせられた行は、塵沙の数ほどもあつて、みなそれ／＼人々の生れつきに終り、情に隨ふて説かせられたものであるから一様ではないのである。世間の人達の現に見て信じて居るものに就いて考へても、明はよく闇を破り、虚空はよく物を含み、大地はよく物を載せて養ひ、水はよく物を潤して芽を生ぜしめ、火はよく物を成熟せしめ、またよく破壊するといふやうに、この世

のものはみなそれ／＼のものに對してそれ／＼の作用をもつてゐるのであつて、その作用は實に千差萬別なるものである。かやうにこの世の物ですらも數限りのない作用をそなへてゐるのであるから、まして不思議な力用をそなへて居る佛法にいろ／＼の利益があるのはもちろんのこと、いはなければならぬ。實に佛法は一門を出るに隨つて、一つの煩惱の門を出で、一門に入るに隨つて、一つの解脱の智慧門に入るのであるから、衆生はそれ／＼の縁に隨つて、それ／＼佛法の門に入り、行を起し、おの／＼解脱を求めたがよいのである。かやうなわけであるのに、おん身達は、私に縁のないところの行をもつてきて、なににて私を惑はし障るのであるか。ぜんたい私の愛する所の法は私に縁のある行であつて、それはおん身達の求むる所のものではなく、おん身達の愛する所の法は、おん身達に縁のある行であるから、それは私の求むる所のものではないのである。そして人おの／＼が樂む所に隨つて、行をえらび、それを修めさへすれば、それで必ず疾く解脱が得られるのではないか。

行者よ、慙んな點から考へてよく知つておくがよい。若し道を學ばうと欲ふならば、凡夫の道から聖人の道、果ては佛の道に至るまでも、なにの礙りもなく學ぶことが出来るのである。しかしながら

若し道を行めやうと欲ふならば、必ず縁のある法に藉らねばならぬ。さうすれば僅かの功勞で、多くの利益が得られるのである。

またあらゆる往生人達に白す。いま私はおん身達のために、一つの譬喩を説いて、それで以ておん身達の信心を守護り、外から邪しき見や、異なつた見解を抱く人達が批難したり、邪魔したりして來るのを防がうと欲ふ。即ちその譬喩はかうである。

こゝに一人の人があつて、西に向うて百千里といふ恐ろしい長い旅をした。ところがこの路の中はきに思ひもよらぬ二つの大河があつたのである。その一は火の河で南にあり、他の一は水の河で北に流れてをる。河の闊さは百歩ばかり、深くして底ひなく、南北に延びて邊がない。この二つの河の中間に闊さ四五寸ばかりの一すぢの細く白い道がある。北の水の河からは波浪が寄せかけてきて道を濕し、南の火の河からは火焰が吹きかけて來て道を焼き、水と火とが互ひに相交りて、しばらくも息む間はないのである。さてかの旅人は、日を経るほごにひろくして、廻かに邊のない處へさしかつて來た。そしてそこには人らしいものもいふては影もなく、たゞ多くの賊や、惡獸が群つて居るのみであつた。然もこれ等の群賊、惡獸は旅人の單獨なのを見て、われがちに競ひ迫り來り、それを囓み

殺さうとした。旅人はこの有様を見て、大に惶れ、直ちに西の方に向つて駆け出したが、思ひがけもなく、かの恐ろしい大河に行き當つたのである。その時かれは心に念言いた。「この河はうち見るころ南も北も邊がない。中間にたゞ一つの白道が見えるけれども、極めて狭い道であるから西方の岸が近いからこいつた所が、さうして、それを渡るこゝができやう。今日はきつと死ぬに定つてゐる。これは疑のないこゝである」。旅人はそこでもこ來た道の方へ廻らうとしたが、早や賊や惡獸の群が一歩／＼旅人めかけて逼つて來てゐるので戻るこゝが出来ず、かれは更に南か北の何れかへ逃げ走らうと思つて見たけれど、そこにも惡獸やら毒虫やらが、かれの方へ向うて追つて來て居るので、それも出来ない状態に陥つた。ために旅人は再び西方に向ひ、道を尋ねて出掛けやうとしたが、そこを行けば必ず前の水火二河へ墮ちる恐れがある。かゝる絶對絶命の場合に於ける旅人の惶怖は非常なもので、到底言葉にあらはすこゝもできない程であつた。かくて彼はまた思念た。「自分は今、廻つても死ぬし、住まつても死ぬし、進んでもまた死ぬのである。さうしても死をまぬがれぬものならば自分は寧ろこの道を進まう。既に道があるからにはきつと渡り得るにちがひない」。この時、東の岸から急に人の勧める聲が聞えて來た。「汝、心を決して、この道を進んだがよい。必ず死ぬやうな心

配はないのである。若しそこに住まつてゐたならば、却つて直ぐに殺されて死なねばならぬであらう。また西の岸の上にも人の喚ぶ聲がした。「汝、心を一すぢにし、念ひを正しくしてまつすぐに進んでくるがよい。自分はよく汝を護るであらう。水火の中に墮ちはせぬかといふやうな怖れは更に懐くに及ばない」。旅人はこの往けき勤むる聲、來れき喚ぶ聲をきいて、身も心も真直ぐにし、しつかりした足ざりで、毫も踏ふ色もなく、疑怖もこももなく、直ちに白道を一直線に西へ進んで行つたのである。かうして旅人が白道を一足、二足進んだかと思ふや否や、東の岸に群がつてゐた賊や、悪獸や、毒虫が「旅人よ、廻つてくるがよい。その道は峻険しいから、到底危くて通れるものではない。そこを行つたならば必ず死ぬに相違ないであらう。だから直ぐに死んで來るがよい。自分等は更に悪心を以て向ふものではないから、少しも自分等を恐れるには及ばないのである」と叫んで、旅人を呼び廻さうとした。けれど旅人はそれを廻顧る様子もなく、心一すぢに、道を念じつゝ、真直に進んだものだから、終に間もなく、西の岸へ到りつき、永くもろくの難を離れ、そこに待ち設けて居た善き友と相會つて、極まりもない樂しみを得るに至つたのである。

以上述べた所は、これ譬喩である。よつてこれからこの譬喩の意味を説き述べやう。まづ東の岸に

いふのは、火の燃えさかつてゐる舎宅のやうなこの娑婆を喩へたものであり、西の岸といふのは極樂の寶國をさしたものである。賊や、悪獸の群が詐り親しむといふのは、人々の眼、耳、鼻、舌、身、意の六根を、それにそなはる識を、その識の對象となる色、聲、香、味、觸、法の六塵を、色、受、想、行、識の五陰を、地、水、火、風の四大を喩へたものである。人影もないひろく、こした澤は、つねに惡友に隨つて、眞の友に逢はざるのをいふのである。水の河、火の河は人々の貪り愛の心は水の如く、瞋り憎しみの心は火のやうであるのに喩へたものである。中間にある四五寸の白道といふのは、衆生の貪り、瞋り、煩惱の心の中によく清淨らかな往生を願ふ心の生れるこころを喩へたものである。すなはち衆生の貪り瞋りの心は強から水や火に喩へ、善心は微ないから白道の如しといつたものなのである。また水波がつねに道を濕らすは、愛の心がつねに起りて、善心を染め汚すこころに喩へたものであり、火焰が吹きかけてきて道を焼くは、瞋り嫌ふ心がよく功德の法財を焼くこころに喩へたものである。次に人が道の上を歩んで、まづすぐに西方に向つたといふのは、もろくの行業を廻けて、西方淨土へ往生しやうとするのに喩へたものである。東の岸に入があつて、この道を往けよと勤めるは、釋尊は已におかくなされたがために、後の人が釋尊を拜

むごころはできないけれども、その説き遺された教法があるから、その教を受けるごころが出来る。よつてその教法をさしていふたものである。一足二足進むご賊ごもが喚びもごすごは、別な解、別な行を持つ悪い見の人達が妄りに自分の間違つた見解を説き述べて、正しい見解の人を惑はし亂すばかりでなく、自分もまた罪を造つて、悪世界に沈むごころを諭へたものである。西の岸の上に人の喚ぶ聲がするごは阿彌陀佛の本願の思召を諭へたのである。次に間もなく西の岸へいたりつき、善き友ご相會ふて、極まりもない樂しみを得たごころは、往生は全體遠いく昔から生死に沈んで、その世界の間をあらゆるちり廻り轉つて來たものであり、そこに纏はり縛られた罪ご障りごは極めて深く、さうしても、脱れ出づるごころできないものである。それがいま、西方極樂を指して、彼の國に往生せよご勧めさせられる釋尊の教を仰ぎ蒙り、またやるせない大慈悲の御心から、我國へ牛來れよご喚び招かせらる、阿彌陀佛の仰せを受けた。かくてそれをかりにしていた、一すぢにこの二尊のみに信じ順ひ、水の河も、火の河も顧みず、ひごへに彼の阿彌陀佛の願力の白道に乗り進んで、しばらくも躊躇ふごころがないならば、命終つてから彼の國に生れて、阿彌陀佛を拜みたてまつり、極まりない慶喜を得るに至るであらうごころを諭へたものである。

また、すべての行者が行住坐臥つねに、身、口、意に修める所の業は、晝夜を問はず、いつもこの信心から作り、つねにこの想ひを以てするから、この信心を廻向發願心ご名けるのである。

また廻向ごいふのは、彼の國に生れ終つてから、この世に還へり來り、大慈悲を起して、生死に廻り入り、衆生を教化するごころをいふのである。

上來説き述べた所の三心、これが具さにそなはつて居さへすれば、自ら行ごして成就せざるものはない。而して既にこの願ご行ごが成就せられた以上、必ず往生せぬごころはしないのである。またこの三心は前の定善全體をば含んで居るのである。

「また三種の衆生があつて、一かの國に生れたいご願ふものがこれである。」

ごころには法を奉けて、その教の如く修行する三種の人のごころを明してあるのである。即ち第一に「慈しみの心があつて妄りに生きものを殺さずごころあるが、この殺生ごころに就ては、口で殺すのごころ、身で殺すのごころ、意で殺すのこの區別がある。その口で殺すごころは殺すもの、許可するごころをいふのであり、身で殺すごころは、身や手でもつて殺したり、また殺すための指授をしたりす

ることをいふのであり、意で殺すといふのは、殺す方便や計校を思念することをいふのである。そして四生のいづれによらず、生きものを殺したものは、みなそれが罪になつて、淨土に生れる障りとなるのである。これに反してあらゆる生きものに對して慈悲の心を起すものは、すべての人々に壽命を安樂を施すものであるから、これをこの上もない勝妙れた戒行とするものである。而して自分が生きものを殺さぬのが止善であり、他を戒めて殺さしめぬのが行善である。また、自分でも、他人でも、初めて殺生することをやめたことを止善と名け、いつくまで、永く殺生しないことを行善と名ける場合もあるのである。次に『戒行を守るもの』といふにもいろいろあつて、人、天、聲聞、緣覺に對する戒を小戒といひ、大きな心を以て大きな行をする人に對する戒を菩薩戒と名けるのである。

第二に『大乘の經典を讀誦するもの』とあるが、これは人々の性質習慣といふものは同一でないから、法を持つにも種々の異なるがある。ためにある人は慈しみの心を持ち、戒行を持つを以てその能とし、またある人は大乘の經典を讀誦するを以てその能とするといふやうな具合に、その能が人によつて一様でない。よつて今この次の人のために、大乘の經典を讀誦するものと説かせられたのである。そして戒行はよく人々をして、人、天、聲聞、緣覺、法身、報身、應身たらしめる功力があり、教法はまた、賢者、聖者の行の因たる智慧を薰じ出す功能があるものである。かくてこの二つの徳用を比較する、おの／＼特別な功力の存することが知られるのである。

第三に『六念を修行するもの』といふのは、所謂佛、法、僧を念じ、戒、捨、天を念ずることである。而してその佛を念ずるは、一すぢに阿彌陀佛の身、口、意の功徳を念ずることをいひ、またあらゆる佛達の功徳をも念ずることをいふのである。次に法を念じ、僧を念ずるは、一すぢに、専ら佛達の誇らせられたみ法や、佛達に屬する菩薩達を念ずることをいふのである。また戒を念ずるは諸佛の戒を念ずることをいふのであり、捨を念ずるはこれまで世に現れさせられた佛達や、現在の菩薩達が作し難いことを作し難い捨て、身を捨て、財を捨てさせられたことを念ずるのをいふのである。蓋しこれ等の菩薩達が、ひこへにみ法を念せむことを志して、身も財も惜まれなかつたといふことを知つたならば、行者達は仰いでそれを學ぶやうに奮勵努力せなければならぬのである。最後に天を念ずるは、これ最高の位にまします菩薩を念ずることをいふのである。これ等の菩薩達は行め難い行を已に卒り、三祇の劫といふ菩薩の永い行の年限も已にすぎ、萬の徳を成就

し、灌頂の位を已に誇らせられた方々である。よつて行者等がこの菩薩を念じ已つたならば、次に自分自らのここを思念すべきである。すなはち「自分は際しない昔から、多くの人達を一しよに、願を發し、惡を斷ちて、菩薩の道を進んで來たものである。所が他の人達はみな、身命を惜まずして道を行め、位を進め、因が圓かに具はつてその果が熟し、聖者の位を誇りえて居られる。その數は大地の塵よりも多い程である。それであるのに自分達凡夫は、その時から今日まで虚しく流浪して煩惱や、惡障はますます増し、福德も智慧もはいよく、微くなり、恰度あやめもわかぬ昏い所で鏡に對へるやうに折角の福德もその光をあらはさぬのである」。かう思ひ付れば、誰しもたゞ驚いて、歎き悲しむより外はないであらう。

「この功德を具へて、—これが上品上生の人達である」。

この冒頭の所に前の修行をするもの、時間の延促が明してある。即ち命の長いものはその一生涯行めつくし、命の短いものは一日でも一時間でも、或はまた一念ひの間でも行めさへすればよいといふのである。そして命がもう一念の間だと思つた人でも、若し命があれば、十念なり、一時間なり、

一日なり、一生涯なりの間、行めるべきである。こもかくも一たび信心を發した以上、この生命の畢るまで、誓つて退轉くことなく、淨土に至るのを最後として、ひこすちにこれを行めねばならぬのである。そしてこの行の全くできぬものは、これを人の皮を着たる畜生名け、人とは名けないのである。

三 上品中生

「上品中生といふのは」

この人は大乘を修め學んだ凡夫の中で、第二に位する善人である。

「必ずしも平等の眞理を説き示した、—これが上品中生の人たちである」。

このの經文に「大乘の義趣を會得し」にあるのは、大乘空の意味を解るこゝを述べさせられたものである。その空といふのは、すべてのものは、みな實在しないものであつて、生死といふこゝも、無爲といふこゝもなく、凡夫といふものも、聖者といふものもなく、智慧だの、愚痴だのといふものもないから、畢竟、まよひの衆生も、さこりの賢者や聖者達も、その體性は一であるといふこゝをい

ふのである。そしてこゝに擧げさせられた中の善人達は、この深い道理を聞いても、平然として、少しの驚きも疑ひも生じないいふこゝを叙せられてあるのである。

次に『因果の道理を深く信じ』とあるのは、まよひごさごりの苦と樂との因果を信じ、その道理を疑ひ謗つてはならぬいふこゝをばかせられたものである。もしこの因果の道理を謗るやうなこゝがあつたならば、淨土に往生するごころか、迷界に於ける善い果報すらも得るごゝが出来ないのである。

四 上品下生

『上品下生いふのは』

この人は大乘を修め學んだ凡夫の中で、最も劣つた善人である。

『また因果の道理を信じて、一第十四觀と名けるのである。』

こゝの經文に『また因果の道理を信じ』とあるのは、因果の道理を信じたこゝはいふものゝ、その心が定まらず、或時は信じ、或時は疑ふものを指していふのである。また、かう解釋してもよからう。す

なはち、この上品下生の人も前の上品上生の人や、上品中生の人と同じく、深く因果の道理を信ずる人である。縦令同じく因果の道理を信ずるにしても、深く信じないものは、しばしば善心が退いて悪心が起るものである。なぜかといふに、深く生死の苦しみを信ずるものは、つひには重ねて罪を犯さぬやうになり、また深く淨土の無爲の樂みを信ずるものは、善心が一たび發れば、永く退失するこゝいふこゝがないけれども、その反對のものはそうは成り難いからである。

次に『大乘の教法を謗らず』とあるのは、よし因果の道理を信ずる信心に斷へ間があつても、大乘の教法を疑ひ謗つてはならぬいふこゝを述べさせられたものである。若し大乘を謗るやうなこゝがあるならば、たゞひ、千の佛がその人の身をこりまいて救はうとせられても、到底救ひ給ふこゝは出来ないものである。

次に『ひこへに道を求める心を發し』とあるのは、こゝに擧げたよろゝの善は、それだけでは功がないやうである。それだからひこへに一念をふるひ起して、苦界を厭ひ、諸佛の境界に生れて、すみやかに菩薩の大慈悲の願を行を修め、更に生死の世界へもこり來つて、普く衆生を濟度しやうと

いふねがひを起さねばならぬといふことを述べさせられたものである。
讃じていはく、

行ご根性のすぐれたるもの

浄土をねがひ、貪瞋をやむ

行によりて三つにわかたる

五念、三心をたすけて修む

一日七日を専らにいそしむ

臺に乗り、畢命に迷を出てむ

うれしや、逢ひ得ぬ御教に遇へり

永く無爲の身を受けめやも

第三章 中 輩 觀

一 中 品 上 生

『中品上生といふのは』。

この人は小乗の根性をもつた凡夫の中で、最も勝れた善人である。

『五戒を受け——西方浄土に生れたい願ふものである』。

こゝではまづ小乗の齊戒をたもたねばならぬといふことを説き、次に小乗の戒は力が微いから、五逆の懃を消す力がない旨を語り、更にこの小乗の戒はもこより犯してはならぬが、そのほかに、なほ前に犯した罪の懃が残つてゐたならば、必ず悔い改めて心を清浄らかにせねばならぬといふことを説き明されたものである。

『このものが命まさに終らうとするときには一つほんだ蓮華が開かれるのである』。
このの經文に阿彌陀佛がもろくの比丘をこもなはせられることを説いて、菩薩を伴はせられるこ
を説いてないのは、これ小乗の根性の人々は、同じく小乗の人達を感じるこいふことをお示しにな
つたものである。

次に出家を讃めさせられることは、阿彌陀佛が出家のいろ／＼なこの世の繫類、家業、仕官や、長途
の征伐、遠國の防禦なごのもろくの苦しみを離れ、人、天、龍、鬼に仰がれ、萬のものに憂へなく、
靜かにして自由であるから、去くも住まるも障りがなく、ために道を修めることができたのであるこ
いふことを讃めた、へさせられることを述べられたものである。

『華の開く時に—これが中品上生の人達である』。

このの經文中品上生の人達は戒行を守ることが嚴重であつて、勝れてゐるから、極樂に往生する
や、たゞちに寶華が開くのであるこいふことを説かせられ、次に淨土の微妙な音聲がみな四諦の徳
をほめた、へるこいふことを明されてある。

羅漢は無生、または無着こいふ意味である。無生はまよひの世界に生れる因を亡くしたもの
であるから無生こいふのであり、無着は既に迷の因がなくなつた以上、また従つて迷ひの苦しみ
から脱れることが出来たものであるから無着こいふのである。

三種の智明は、一には宿命明で、昔からの經歷を知る力をいひ、二には天眼明で、未來を見透す
力をいひ、三には漏盡明で、現在を洞察する力をいふのである。

八解脱は、一、他人の身の不淨を觀察して、自己の身の不淨を知り、以て身を愛する心を捨て、
二、さらにこの想ひを強むるため死後の不淨を觀察し、三、白骨の清淨らかさを觀察して愛着をたち
四、形なき世界の虚空無邊なる所にさき入り、五、識の自由なる世界を誇り、六、想ひのなき世界
をさき入り、七、すべてを離れたる世界をさき入り、八、識の滅びつきたる境地をさき入るのをいふので
ある。

二 中品中生

『中品中生のこいふのは』。

この人は小乗の根性をもつた凡夫の中で、第二に位する善人である。

『一日一夜の間に八戒をたもち、一これが中品中生の人たちである』。

こゝに一晝夜の間、三三ほりの戒をたもつべきこゝが説いてある。即ちその間、清らかにこれを守りて犯すこゝなくこのやうな軽い罪でも、極めて重い罪を犯すやうに思つて、身も口も意も嚴重に威儀をたもち、すこしも亂れるやうなこゝがあつてはならないのである。

三 中品下生

『中品下生といふのは』。

この人は世間一般の道德を守る勝れた凡夫である。

『善き男女があつて、父母に孝養をつくし、一第十五觀ミ名けるのである』。

この經文のはじめの所に世間の道德を守る状態が説いてある。即ちまづ父母に孝養し、伯叔兄弟の

六親に順ふこゝを述べ、次にかゝる人は性質が調柔で善いものであるから、自分の事も、他人の事も差別なく、苦しみに逢ふて居るものを見ては、慈しみ、敬ふ心を持つものであるといふてあるのである。一體この人々は、これまでに佛のみ法に逢ひ奉たこゝがなく、ために淨土をねがひ求めるこゝを知らないものであるけれども、本來父母に孝養をつくす善人なのである。
讚じていはく、

行ミ根性の中らなるもの

一日を慎しみ、蓮に打ち乗る

父母にかしづく、この者を教へ

西の快樂の因をこそ説け

佛ミ聲聞ミ來り迎へて

直に往く、彌陀の華座のほこり

寶の華に七日かこまれ

やがて開けて證果をぞ得む

第四章 下 輩 觀

一 下 品 上 生

『下品上生といふのは』

この人は十惡を造る罪の輕い凡夫である。

『若し衆生あつて、もろくの罪をつくり、——罪がみな消え失せるのである。』

この經文は、まづ下品上生の人が、この世に生れ出てから造つた罪の輕重を説き、次にその人達が命終らうとするときに、たまく善い知識があつて、法を説いて聞かせることを述べられたものである。而してその法を説いて聞かせる所は六段の叙説になつて居る。即ち一にはこの人の命の長くないことを示し、二には思ひがけもなく、往生の信心を得た善い知識に遇ふことを述べ、三にはその善友がこの惡人のために多くの經典を讚めた、へることを説き、四にはそれが經典を聞いた功力によ

つて千劫の間の罪が除かれたことを明し、五には多くの經典を讀めた、へた善友が、更に轉じて阿彌陀佛のみ名を稱へよと教へたことを述べ、六にはこの惡人が善友の教に隨つて阿彌陀佛のみ名を稱へたがために五百萬劫の長い間の罪が除かれたことを説きあらはされたものである。所がこゝに注意せねばならぬのは、この惡人が大乘の十二部の經典を聞いた功德によつて除かれた罪は千劫であるのに、阿彌陀佛のみ名を一聲稱へただけで、五百萬劫の罪が除かれたといふことである。これはどういふわけであるかといふに、この惡人は自ら造つた罪の障りが重い上に死の苦しみが逼つて來て居るものだから、善友が多く經典を説いて聞かせても、それを能く飲み込むだけに心が落ち着いて居る散り亂れて居るものである。そのためにこれによつて罪の除かれることが少ないのである。けれど佛のみ名はたゞ一つであるから、よく散り亂れた心を攝へこめる功德があるばかりでなく、正しい念ひでみ名を稱へるならば、その心が堅くおちついてくるから、能く永い間の罪が除かれるものである。

『この時かの阿彌陀佛は、——生れることが出來たのである。』

こゝの經文のはじめの所には、この罪人が念佛を稱へた功力によつて、化佛化菩薩の迎へに預かることが述べてある。即ち最初正しく行者がみ名を稱へた時に、阿彌陀佛が化佛、化菩薩をお遣はしになり、その化佛、化菩薩は行者の稱へる聲に應じて、お姿を現はさせられるといふことを叙し、次にそれが現はさせられた化佛、化菩薩が俱にこの行者を讀めた、へさせられるといふことを述べ、更にその讀めさせられる化佛、化菩薩の言葉をきくに、たゞ阿彌陀佛のみ名を稱へた功によつて、自分達は今汝を迎へるのであるといはれた、けですこしも經典を聞いた功のこゝは仰せられないといふことを明されてあるのである。ぜんたい、阿彌陀佛の誓願のお意からいふと、ひこへに正しい念ひを以てみ名を稱へることを勧めさせられたものである。それであるから、み名を稱へる行者が疾く往生するこゝのできるのは、雜散の善業をつこめる行者の到底比較にならないものである。これこの經ばかりでなく、その他の諸部の經典中にも、處々にみ名を稱へる人を勧め、めた、へて、廣くこれを勧め、以て速かに往生の大利益を得ねばならぬと説かせられたる所以なるものである。

二下品中生

『下品中生のいふのは』

この人は佛の戒を破つた第三に位する罪ある凡夫である。

『もし衆生あつて五戒、——必ず地獄に墮つべきである』。

この經文は七段に分れる。即ち先づ總じて造惡の人を擧げ、次にこの人がもろくの佛の戒を犯すことを明し、次に僧の財物を盗むことを説き、次に生活のために法を説いて傳ふことを述べ、次にすべて愧ぢるこいふ心のないことを示し、次にもろくの罪を兼ね造つて、内には惡心を發し、外には身、口に惡しき業を行ふから、見るものがみな憎むこいふことを叙するに共に、それが惡心をもつて自らを莊嚴るものであるこいふことを述べ、最後にこれ等の罪狀をしらべて見るに、必ず地獄へ墮ちねばならぬものであるこいふことを説かせられたものである。

『されば命のまさに終らうとするとき、——これが下品中生の人たちである』。

この經文のはじめの處には、この罪人が善き知識に遇ふて、阿彌陀佛の威徳を説くのを聞き、その功によつて臨終に化佛化菩薩の御迎へに接し、以て往生するこことが述べてある。而してそれが九段の叙説になつて居る。即ち一、罪人の命の長くないことを示し、二、地獄の火が現れ來ることを明し、三、地獄の火の現はれたときに恰度、善き知識が來逢はせたことを示し、四、その善き友が罪人の爲めに、阿彌陀佛の功徳を説き聞かせることを述べ、五、罪人が阿彌陀佛のみ名を聞いて、永い間の罪の除かれたことを示し、六、その罪の除かれたがために、地獄の猛火が變じて風になつたことを説き、七、その風に隨ふて天華が雨り、それが行者の目の前に列んだことを語り、八、化佛化菩薩の迎へ給ふことを叙し、九、往生するこことの速疾なる旨を明されてあるのである。

三 下品下生

『下品下生のいふのは』。

この人は具さに五逆等を犯した重罪の凡夫である。

『或は衆生あつて、惡業である五逆——窮まりなかるべきである』。

こゝは、この人の犯した罪の相を説かれた所である。即ちはじめにこの人は軽い罪も、重い罪も、みな犯してをるこゝを説き、次にその悪を造るこゝが多いから、罪もまた軽からざるこゝを示し、次に既に業を行ふた已上はその報を受けなければならず、因をまいた已上はその果を引き受けねばならぬ道理から、蒔いた因も、行ふた業もみな業にあらざるこの罪人は、當然苦しみを受けるを得ざる旨を述べ、更にその造つた悪の因が何一つ缺けてゐないから、報いられる苦しきもまた窮まりなかるべきこゝを説き明されたものである。

こゝがこゝに一つの疑問がある。それは『大無量壽經』の四十八願の中には、五逆を犯したものと正を謗つたものとは、極樂に往生するこゝができぬと説かせられてあるにもかゝらず、この『觀經』の下品下生の中では、五逆を犯したものが攝はれてゐるのはさういふわけであるかといふこゝである。

ぜんたい、教法を謗るのこゝ、逆罪を犯すのこゝ、この二つの業はその障が極めて重いから、人々が若しこの罪を犯したならば、直ちに阿鼻地獄に入り、永い間、周り歴つて、そこを出で通るべき時がないのである。それであるから世尊はこの二つの罪を人が造るこゝを恐れて、方便をもつて、四

十八願の中に、教法を謗るものこゝ、逆罪を犯すものこゝは極樂に往生するこゝができぬと説かせられたものなのである。それは決してこれ等の罪を犯したものを全然攝けられないといふわけではないのである。こゝが今、この下品下生の人々は已に五逆を造つた人である。ためにこれを捨て、おけば生死の海に流れ漂うて行くべき運命のものにあるのである。こゝに於てか、佛は大慈悲を發して、人を攝ひ取り以て淨土に往生せしめ給ふのである。けれどこの人も未だ教法を謗る罪は犯して居ない。だから世尊はそれを戒めてもし教法を謗るやうなこゝがあれば、極樂に往生するこゝはできぬこゝの罪を犯さしめむがために、それを制めさせられたのである。かくて畢竟五逆を犯したものとや教法を謗つたものは、極樂に生れるこゝができぬと説かせられたのは、未だこの罪を造らない人に對して説かせられた戒めであつて、已に造つた人があれば、佛は大慈悲をもつてこれを攝ひ、淨土に生れしめ給ふのである。しかしこれ等の人は、縱令淨土に往生するこゝができて、華の中に籠められて、永い年月の間をそこで過さねばならぬのである。そしてその華の中に含まれた人達は、三つの障りを受ける。すなはち、一には佛や諸の聖者達を拜みたまつるこゝができません二には正法を聞きたてまつるこゝができません、三には十方の淨土を歴めぐりて、佛を供養したてまつるこゝができません。

のである。かやうに華の中に籠められた人は三つの障りを受けねばならぬけれども、その外には少しの苦しきものもないものであるから、經には『華の中に居るのは、怡度、僧が三禪の樂しみにひたつてるやうなものである』と説かせられてある。この經の文から見ても、華の中に含まれて永らくの間、淨土の地を踏むことができぬとはいへ、阿鼻地獄の中で、長時永劫、もろくの苦しきを受けらるゝらべてはこれ程勝れてゐるか知れないのである。

『所がこの凡愚なものが――第十六觀に名づけるのである』。

この經文のはじめの所には、この罪人が臨終に正しく教法を聞き、念佛して、現在に利益を蒙むることを説き明されてある。而してその叙述が十段に分れる。即ち一には惡を造つた人を標あけ、二にはこの人の命のものはや長くないことを示し、三には臨終に善き知識に遇ふことを明し、四にはその善き友が安慰め教へて、念佛せしむることを説き、五にはこの罪人が死の苦しみに逼められて、念佛する能はざることを明し、六には善き友がこの罪人のありさまを見て、更に教を轉へ、阿彌陀佛のみ名を口づから稱へよと勸むることを明し、七には罪人、この勸めによつて稱へた念佛の數を稱へる聲

に絶え間のないことをしめし、八には永い間の罪の除かれることを説き、九には臨終に正しい念ひになり、そこへ黄金の蓮華が來りあらはれることを明し、十には速かにこの世を去つて直ちに願ひ望める所の淨土に生れることを示されてあるのである。

讃じていはく、

行に根性の劣りたるもの

十惡、五逆、貪欲、愼恚

法を謗るなき、重き罪愆

みな犯しつるが猶悔いぬもの

終時に苦の相、雲に集まり

地獄の火焰の前に現はる

時に善き知識、來り勸めて

かの御佛の名を稱へしむ

化佛菩薩、聲するかに

来て迎へ入る寶の蓮へ

障り重くて、華なかくくに

開かねど、終に菩提をぞ得む

前の卷に於て十三觀を説明して、これを定善名けた。而してそは草提希夫人の請ひに應じて、世尊がお答へになつたものである。所が今この卷のはじめより述べ來つた所のものは、三福九品の説明であつて、これ、散善名づけらるべきものである。蓋しこれは世尊が御自身にその深き思召をもつて説かせられたものなのである。かくて以上を以て、『觀經』の正説を解釋し終つたわけである。

得

益

「世尊がかやうにお説きなされたとき——廣大な相を見たてまつり」。

こゝは草提希夫人と五百の侍女とが、前の序説の中で説かせられてあつたやうに、世尊の眉間の光の臺の中に極樂の相をおがみたてまつつたことを、こゝで再び説きあらはされたものである。

「尙阿彌陀佛——眞理を悟つたのである」。

こゝは草提希夫人が、第七觀の初めで、無量壽佛をおがみ奉た時に、不生不滅の證果を得たことを更にこゝに説き出されたものである。

「五百人の侍女も豫言を與へられた」。

こゝは五百の侍女がこの勝れたありさまを見て、おの／＼無上の道を求める心を發し、淨土へ生れやうとの願ひを懐くに至つたことを説き、次にこれ等の侍女達が世尊の豫言を受けて、みな彼國へ生

れ現前三昧を獲べきことを説き明されたものである。

『またここに居た量り知られぬ程の神々も——道を求める心を發したのである。』

前の序説の韋提希夫人の厭世の状を述べてある所に、帝釋天や、梵天や、四天王などが王宮にまします世尊に隨從し奉つたさいふこころが説かれてあつた。即ち今、これ等の神々が空中から世尊のみ法をきき、或は世尊の白毫がいろくくに轉じ變るさまを拜み、或は阿彌陀佛の金色の靈儀を見奉り、或は往生に九種の差別のある旨を聞き、或は定善を行めるものも、散善を行めるものもともにみな攝はれて、淨土に生れるさいふこころを聞き、或は善を行ふたものも、惡を行ふたものもみな同じく淨土に生れるこころができるさいふこころを聞き、或は西方の淨土は目の前にあつて遠いところではないさいふこころを聞き、或は一生涯、決定してもつばら念佛を勵めば、永く生死の世界から脱れられるさいふこころを聞くなき、廣く希奇しく不思議な利益を説かせられるのを聞いて、おのく、無上の道を求める心を發したさいふこころを此處に述べさせられたのである。

まことに佛は聖者の中でも最も尊いかたでありますから、その述べさせられたお言葉がすぐに經

典となり、生死の凡夫は、それを食み、それを聞いて、よく利益を蒙むるこころを得るものなのである。

弘傳

『此に阿難尊者は座から起つて、一心に記憶して忘れてはならぬ』。

こゝは阿難の問ひに由りて、世尊が正しく人三國土をならべ擧げ、經の名を立てさせられたことを述べ、次にこの經に依りて行をなすならば、惑業苦しみこの三つの障の雲が、自ら巻きおさまるこいふことを説き明されたものである。

『まことにこの觀佛三昧を—今更説くまでもないことである』。

こゝは無量壽佛と觀世音、大勢至の二菩薩のみ名を聞くことによりて得る利益を、信じて心に憶ひつゞけることによつて得る利益を比較して、そのいづれが勝れてゐるかを示し、その勝れた方を人に勧めて行めしめ給ふことを説き明されたものである。すなはち初めに三昧の名も心に總ての定善を示し、次に定善の觀に依りて修行したならば、この一佛二菩薩をおがみ奉ることが出来ることを明し、更に再びよくこの教を行める人々を擧げ、最後にこの一佛二菩薩のみ名を聞くだけでも、それに

よりて永い間の罪愆が減びるのに、まして正しき念ひでこの一佛二菩薩に歸依し奉つたならば、それによつて證りを得られぬ道理はないこいふことを述べさせられたのである。

『故にもし念佛するものは—阿彌陀佛の淨土に生れるのである』。

この經文は正しく念佛三昧の機能が超えすぐれてゐた、實にほかのもろゝの雑多な善なきは比較にならぬものであるこいふことを顯し示されたものである。而してこれが五段の叙説となる。すなはち、一にはもつぱら阿彌陀佛のみ名を稱ふることを示し、二にはみ名を稱へる人を指して讚めた、へることを明し、三には若しよく相ひ續けて念佛するものがあるならば、その人は甚だ希れな人であつて、更にたゞへやうがないから、これを白蓮華に喩へるこいふことを説かせられてゐる。これに就てこゝに少しく注意して置きたいのはこの白蓮華のことである。この華は人間世界に於て最も好い華といはれ、まためづらしく希れな華と名づけられ、或は人間世界での上々の華、妙へなる好き華なき、名けられる華である。而して今、念佛するものはこの白蓮華と同じく、人間の中に於ける好き人、妙へに好き人、上々の人、希れなる人、最も勝れた人であるこいふのである。次に四にはもつぱら阿彌陀

佛のみ名を稱へるものは、觀世音菩薩と勢至菩薩とが常につき隨ふて、影から護りたまふから、これ
 恰度その親しき友のやうなものであるといふことを明し、五にはこの世に於て既にかくの如き利益を
 蒙むるから、命終れば直ちに阿彌陀佛の淨土に往生することができるといふことを説かせられてある
 のである。かうして淨土に往生し終れば、そこに於て長い間み法をき、十方の世界を歴めぐりて諸
 佛を供養し修めねばならぬ行を圓らかに修め果して證りを開くのであるから、成佛の座につくことは
 決して遠いことではないのである。

『世尊は更に言葉をつゞけて、—無量壽佛のみ名を持てといふことである』。

こゝは正しく世尊が阿彌陀佛のみ名を阿難尊者にさづけて、遠く末の世までも弘め傳へるべきこと
 を依囑せられた所である。蓋し以上述べた所を以て釋尊はこれまで、定善と散善との二つのみ法を説
 き、その利益をあらはし示されたが、これを阿彌陀佛の本願に望めて見れば、釋尊のお意は畢竟衆生
 にひきへに専ら阿彌陀佛のみ名を稱へさせやうといふ思召しから、定善散善の利益を説かせられた
 ものであるといふことが知られるのである。

『世尊がこの語をお説きなされたとき—大きな喜びを覺えたのである』。

こゝは世尊にみ教を説きたまへし請ふた韋提希や、またそれを末の代に傳へる使命をもつた阿難な
 すがみな、かつて聞いたことのないみ教を聞き、かつて拜んだことのないものを拜み、甘露の味ひに
 浸つて、自ら抑ふる能はざる大きな喜びを感じたことを説かせられたものである。

耆闍崛山の説教

「かくて世尊は虚空を歩んで、耆闍崛山に還らせられた。」

これから以下は耆闍崛山に於て、この『觀經』のみ教を阿難尊者が大眾のために再説することを書き明したものであつて、こゝはその序説である。

「山に還つてから阿難は大眾のために更に廣く上の次第を説き。」

こゝは正しく阿難尊者が王舎城の説教を互ねて説けることである。

「無量の神々も―それづくに退いたのである。」

こゝはこのみ教の世に傳はる状態を述べた所である。

以上、『觀經』一部の經文とその意味を解釋し終る。

あゝ思へば眞實の宗教たる阿彌陀佛の本願には實に遇ひ難く、淨土に生れるための肝要な門戸たる定善、散善のみ教にも亦たやすく逢ふこと能はざるものである。こゝに於てか、釋尊は迷の世界にさまよへるものをして、淨土に生れしめむと思召し、阿難に對はせられて、このみ教を遠く末の代までも傳へ弘むべきことを勧めたまふたのである。一體釋尊はこのみ教を説かせらるゝがために不思議な力を現はし、自由自在にその御姿を變へさせられ、或は隠れ、或は顯はれて、相手の心に隨ひ、王舎城の宮殿に於て密かに教化を施させられたのであるが、耆闍崛山にありたる聖者達は、智慧が乏しいものであるから釋尊が耆闍崛山から御姿を隠させられたことに疑を懐き、後、釋尊が山に御還りになつてからも、その委しい様子を知らなかつたのである。ために阿難尊者がそれ等の聖者達のために、王宮のみ教であることの定善、散善のみ法を説いて聞かせたものだから、そこにゐたものゝの大眾がこゝにこれを聞いて、このみ教を信じ、み教の如く行め奉つたものである。

跋の詞

敬んであらゆる縁ある所の知識等に白す。私は既に疾くから生死に漂ひ來つた凡夫であつて、智慧が淺く、見解の足らざるものである。しかるに佛のみ教は幽玄微妙なものであるから、輕々しく從來あつた所のものは異つた解釋を施すべきものではない。こゝに於てか、私は遂に心を籠めて、堅く願をおこし、私の解釋がもし佛のお意になつてゐたならば、そがために不思議な驗をあらはして證明せられむこゝを請ひ求めたのである。すなはち、眞心をさゝけて、虚空に滿ちわたり、法界に遍ねきあらゆるみ佛のみ教も僧の三寶、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、觀世音、大勢至、極樂のもろゝの菩薩達、すべての淨土の莊嚴に歸命し奉つて願ふやう、「私は今、この『觀經』の肝要な意味を説き述べて、むかしの人達や今の人の『觀經』に對する見解の誤つてゐるのをば正し、佛の正しきお意をあらはさうと欲ふのであります。若し、過去、現在、未來の佛達や、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛の大慈悲の本願のお意にかなふてゐるならば、ねがはくば、夢の中に於て、上に歸命し奉つたあらゆる佛達や、菩薩達や、淨土の莊嚴なさをば拜見せしめたまへ」こゝ。かくの如く佛の御像の前で、願を結し、毎日に『阿

彌陀經』を讀誦するこゝ三遍、阿彌陀佛の名を稱ふるこゝ三萬遍、至心を以て願を發したのである。所がその夜、西の方はるか空中に於て、さきに述べたやうなもろゝの境界が悉くみな顯はれたのである。即ちもろゝの寶の色をした山々が限りなく重なりあひ、いろゝの光明が大地を照らし、大地は金色にかゝり、やき、その中に諸佛や、菩薩が或は坐り、或は立ち、或は語り、或は黙し、或は身や手を動かし、或は靜かにして動かせられぬやうな色々な瑞相が見られた。私はこの尊い瑞相をおがんだものだから、掌を合せ、やゝ久しく立ちてそれを觀じて居たのである。するこその中に眼が覺めたが、覺めてからの喜びは非常なものであつた。そこでこの『觀經』の意味をば一々義門を分けて書き録したのである。而してそれから後は毎夜、夢の中につねに一人の僧があらはれさせられて、私のこころへ來り、この經の幽玄なる意味を授けたまふたが、それが終るこゝ、またその姿が見えなくなつてしまつた。かくて後、この四帖の書を脱稿し終つてからまた、私は至心こめて、七日の間を期し、日ごとに『阿彌陀經』を誦するこゝ十遍、阿彌陀佛の名を稱ふるこゝ三萬遍に及び、初夜と後夜には、極樂淨土の莊嚴のお相を想ひ浮べて、誠實の精神から専ら上の法の如く歸命し奉つたのである。さうするこその夜、三揃への石臼の輪が道のほりに獨りまはつてゐたのをおがんだのである。こゝころが思

ひがけもなく一人の人が白い駱駝に乗つて、私の前に現はれて來られた。そしてその人が私に勧めるやうには「師よ、おん身はよろしく努力し、決定して淨土に往生するがよい。決して後へ轉び退くやうなこころがあつてはならぬ。この世は惡に穢れてゐて、苦しみの多い世界であるから、このやうな所に勞はしき生を食り、執着して居るべきではない」。この言葉を聞いて、私は「私はいま、まのあたり賢者の好心ある誨へを受けましたからには、命の終るのを最後として、それまでは決して懈慢の心をおこしますまい」と答へたのである。するに更に第二夜には阿彌陀佛が眞金色のお身で、七寶の樹の下にある黄金の蓮華の上に座らせられ、十人の僧が阿彌陀佛をまじりまいておの／＼の寶樹の下に坐つて居るのを見た。そして阿彌陀佛の坐らせたまへる樹の上には、天の衣が垂れかゝつて居た。私は面を正して西に向ひ、掌を合せて、坐しながらこのお相を観じたのである。次いで第三夜にはふたつの幢杆があつて、極めて高く顯はれ、五色の幡がたれかゝつてゐるのを拜んだ。そして道路が縦横に貫いてゐて、誰でも礙りなしに拜むこころの出來るものであつたのである。既にこれだけの瑞相を拜んだものであるから、最早七日に至らずして、休止するこころにしてしまつたのである。以上述べたる如きあらゆる不思議な瑞相の顯はれさせられるやうにこの願を發したこころは、全く自

分の爲めではなく、私の本心は衆生にこの書を信ぜさせやうといふ考へからこの願を發したものに外ならぬ。こころが幸ひにもこれ等のお相があらはれさせられ、それを拜みたてまつるこころができた私は少しの包み藏しもなく、謹んで、この書の後にこのこころを述べ添へて、末の代の人達に傳へ聞かしむるのである。

ねがはくば識あるものである限り、これを聞いて信心を生じ、この書を見ては、西方淨土に歸命する心を發して頂きたいものである。

ねがはくばこの功德を普ねく衆生に廻向けて、みなこもに道を求むる心を發し、おの／＼慈しみある心をもつて相に向ひ、慈悲の眼を以て相接し、菩提を得るまで互ひに眷屬となり、眞の友となつて同じく淨土に生れ、共に成佛せむと思ふのである。

以上書き記した四帖の書は、佛の證明を請ふて、意義を定めたものであるから、一句一字も、これを加減してはならないのである。この書を寫さうと欲ふものは、ひこへに佛のみ教の如くに尊信すべきものである。

解題

本讚は次下に擧げたる『觀念法門』、『往生禮讚』及び『般舟讚』と共に、一般に總括して具疏と稱せらるゝ所のものである。蓋、具疏とは本疏に對した名であつて、その本疏なるものは前の『觀經』四帖疏をいふのであるが、本讚等の四部の書は、畢竟その内容、これに具備すべきものであるといふことで、この名を得たものである。思ふに善導の古今楷定の精神を發露した教理的方面は、遺憾なく『觀經』の註解たる本疏によつて顯されたが、その教理に順應した修道の實行の方面はこれを今の具疏によつて明らかにせられたるのである。善導はこゝにその燃え立つた宗教的情熱を藉り、自ら胸のうちに溢ち溢れた法悦の念ひを謳ひ出し、それによつて我等の崇高なる修道生活を示さむとして居られる。それが數編の頌歌のうち、本讚はその第一に置かれたるものである。

本讚の内容、善導が生涯專持せられたる『阿彌陀經』を讚頌し、以て一日一夜法事供養の聖筵に置ける規則作法を定められたるものに外ならぬ。而してその規則作法なるものは、要するに轉經と行道と讚嘆との三者に盡されて居ること、本讚の題號が原典の上巻の始めに『轉經行道願往生淨土法事讚』とあり、下巻の首尾に『安樂行道轉經願往生淨土法事讚』とあるによつても知ることが出來やう。但、上巻の終には『西方淨土法事讚』と題してあり、一般には單に『淨土法事讚』と云ふが、若しくは『法事讚』と云ふが稱して居る。よつて今はそれに從ふて題號を付することとしたのである。

淨土法事讚

沙門善導集記

上の卷

*四天王を招ぎまつる、疾く道場に入りたまへ

*師子王を招ぎまつる、師子はまた逢ひ難し

その身の毛衣、奮ひたつれば、なべて魔は競ひしりぞく

頭あけ法師を招ぐ、涅槃の城いざや取らむ

序詞

思へば曠漠とした、娑婆、危い火宅の如き世界の邊もなきことである。普ねく、六つの迷の世々

淨土法事讚

を廻り來つて、長らく重たい夜の闇のたゞ中に住んで居たものだ。靈の眼が生れながらに廢ひて居るものだから、未だ智慧の御光に照らされもせず。聖者の引導は思ひのまゝであるのだけれども、人は皆生死の巷を往き去り、往き來り、逝く水の流れて止まぬ状態。これでは鬼でも救はるゝべきよしもない。魂宿せる迷ひ人等の際なきこと、日の進しなきこと、勝れた縁に遇ふことは何時まで待つてもむづかしい。古き御佛、海徳初際如來から今の時の釋迦、諸佛まで、世々に皆誓を立て、如何なるものも見捨て給はず、御身も御口も御意も、聖き業をもて、ひろく教を垂れまして居る。けれどわが身の悲しさ、無明の障りが多いために、御佛の出世に逢ひ奉るこゝが出来ず、又たこへ逢ひまつたにしても、蓋のある器の水を入れやうと思つても入れるこゝの出来ないやうな心では、何の所詮もありはせぬ。神々しき御光は、生きこし生ける、什んなものをも簡びなく照らし給ひ、御惠は情なきものに迄も及んで、皆悉く法の水に潤ほはしめて居らるゝ。實に我等はかうした法の眞清水を湛へた底に沈んで居るのだが、餘りに心の煩迷であるがために、永久にその潤ひに浸る時もなく、煩惱のたね、苦しみのむくい、かたみに相寄りて、時に臨み、益々熾に毒の焰が燃えさかるばかりである。

仰ぎ見るに大悲のみめぐみは重く、等しく凡夫の身田を潤はせ、智慧密かに加へられて、佛道の芽を増長せしめらるゝ。慈悲の方便を以て教を垂れ給ふこゝ宜しきに隨ひ、勤めて彌陀を念じ、淨土に歸せしめます。淨土の美しさ、地にはもろくの珍しき寶の光り色が競ひ輝き、功德の水には清く艶なる蓮の花が影を映して澄みわたり、透き徹つて居る。重なり合へる寶の高樓があり、そしてそれは奇しき光にきらめいて居る。林の樹の間には瓔珞が釣るされ、風のまにまに妙なる調を奏で、居る。華の臺の嚴めしさ、崇高さ。凡べて恁んなものが比へむにもものもない。それからそこに住まへる聖者達は見えれば、身は紫金の色うるはしく、ひかり千日にも踰る、度き限りの御姿で、大空を無礙自在に往來して居らるゝ。この世ならぬ、何國にも超え勝れた御國、地も空も、色にそのけぢめもなく、他方の世からなる凡夫や、聖者が、願ひを掛けて來り向ふに、そこに到れば、凡て皆同じ證果を退かぬ菩薩となる。

けにもかうした淨土である。だから御佛は善き企圖をめぐらし、如何なるものにも、この娑婆を厭うて、極樂に生るゝこゝを願へよと勧め、そのものに専ら彌陀の御名を稱へ、且つ『彌陀經』を誦せむこゝを求めらるゝ。それはその事によつて、かの麗しい莊嚴を知り、この世の苦患を厭うて、生涯憍

まず、深い信心しんじんに怠りおぼろない修行しゆぎやうに耽ふけるやうになるからである。あゝこの功德くどくを以て、凡ての心こころ靈たまある者にそなへ、命いのち盡つきたる曉あかつき、華はなの臺うゑに乗りて、皆みな隔へだてなく、かの御國みくにに臨まみ至いたらしめやう。

入道場の作法——凡そ自分のためや、他人のために修道の靈場れいじやうを設けむとする者の心得こころえは次の如くである。先づ堂舎だうしゃを嚴きんかに飾り立て、尊像そんざうを安置あんちし、幢幡たうばんや、華はなを供へ、次で身體からだを洗あらひ潔きよめて、清淨じやうじやうな衣ころもを着つけ、道場だうじやうに入りて、修法の模様しゆほふもやうを聴きかしむる。それから高座かうざに登りて、佛菩薩ぶつぼさつの御名みなを呼んで招まねきまつる人ひとと、下座げざにあつて、それに和わし讚さんする者ものとは、盡ことごとくく立ち、その餘よの一般いぱんの集會しふゑしや者は坐すわらしめて置く。そのうち先づ一人の者が香かうを焚たき、華はなを撒まき散ちらし、尊像そんざうを一周ひとめぐりし終はつたらば、徐おもほるに法の如く聲こゑを擧あげて、召請せうじゆの辭ことばを列つらねるのである。

三佛を敬禮するの歌

*般舟三昧はんしゆさんまいによりて悦よろこび、樂たのしみ

彌陀みだの淨土じゆつどに生あれむ願ひ

無量むりやうの快樂けつらくを身に受うけなまし

(この歌各歌節の初めにうたふ)

人ひとみなに厭いとはざらめや、迷まよひの三つの世よ

*惡あくの巷ちやうは三つながら、名なを絶たたれまし

焰ほの燃もゆる舍宅いへなれば、もこより住すむには憂うれかりけり

み誓ちかひなれば、西にしの御國みくにに、いざ往ゆかむ、めぐみを享うけて

慈恩の程の深きもの、おろがみ、常に受けまつれ

大き衆よ、華を手に、敬ひ、かしづき

彌陀佛よ、この道場に入りませし、請ひまつれ、いざ

大なるみ誓ひを賜ひ、時をたがはず、迎へます

觀世音、大勢至、さては塵沙なる聖者達

みほごけに従うて、華に乗り、來 此會座に入り給へ

あ、觀世音の手を把りて、華の臺に牽き入れ給ふ

* 無勝莊嚴淨土のあるじなる釋迦牟尼佛

わがこの願ひ、微かなれども、受けて入りませ、この道場に

身を碎きても謝し得ぬは、釋迦牟尼佛の御めぐみ

海原なせる、かの國の、莊嚴界の聖者達

みほごけに従うて、華に乗り、來て此會座に入りたまへ

けにその聖者達ぞ、衆生を救ふ御佛のたすけします

十方に恒河の沙なす佛達、舌舒べて

われ人が安樂國に生れなむ、御證にこそ立ち給へ

そはまごこ、世にたぐひなき救ひのめぐみ

慚愧す、かゝるみめぐみゆ

わが此願ひ、微かなれども、受けて入りませ、此道場に

こゝろ専らに期しまつる、淨土に生れむ、佛の前に

かの一々の御佛の海原なせる聖者達